

<論文> 中国漁村に関する研究：山東・浙江両省を中心として

著者	田畑 久夫, 金丸 良子
雑誌名	比較民俗研究：for Asian folklore studies
号	9
ページ	53-98
発行年	1994-03-31
その他のタイトル	<Articles>A Study on Chinese Fisher's Village-Based on Monographs in Shangdong and Zhejiang Prov.,China
URL	http://hdl.handle.net/2241/14299

中国漁村に関する研究 —— 山東・浙江両省を中心として ——

田畑久夫※ 金丸良子※※

1. 問題の所在

中華人民共和国の水産業は近年急速な発展を示している。ソ連邦が1991年に崩壊¹⁾した現在、実質的には世界第1位の水産国に躍進した²⁾。しかしながら、その実態には不明な部分が多い。その最大の理由は、水産業の基地でもあり、基盤ともなっている漁村や³⁾漁村を構成する漁民に関しては、ほとんどその概要が知られていないということに起因すると考えられる。すなわち、中国国内におけるかかる方面での研究があまり実施されていないということに加えて、漁村の大半は、主として国防上の理由⁴⁾から、外国人研究者が自由に立ち入って調査・研究することは勿論のこと、観察あるいは参観することさえ禁止されている、いわゆる「未開放地区」に国家より指定を受けているためである。

以上論じたように、中国における水産業に関する研究は、その重要性にもかかわらず、久しく等閑視され続けてきた。本稿では、このような現状を克服しようとすることを目的の1つとしている。しかしながら、西南中国に居住する少数民族のヤオ族の場合においても指摘した如く（田畑久夫・金丸良子 1993 pp. 97～99）、調査対象集落のほとんどが、上述の「未開放地区」に位置しているため、たとえfield surveyを実施することができても、当然ながら各種の制限⁵⁾が伴う。それ故、本稿における調査内容に関しても、同様の制限・限界が存在することは認めなければならない。とはいうものの、以下において論を展開する、主として漁村に関する1次資料は、すべて筆者らが現地へ赴き、直接入手したものである。また、調査対象とした漁村も、人民共和国成立後、外国人研究者としては最初に歴訪し、field surveyを行なった集落である（田畑久夫 1989, 1992, 1993, 田畑久夫・金丸良子 1987, 1991 a・b・c・d）。

このように、非常に限定された条件下でのfield surveyであるが、次に述べるような観点から、中国の漁村⁶⁾をとりあげることにした。すなわち、日本固有の伝統文化の基盤あるいは根底となっていると考えられている文化は、一般に基層文化⁷⁾（Basic Culture）と称されている。かかる文化は、個々の固有伝統文化の源流あるいは形成を考察するうえからも、主要概念の1つといえよう。日本の固有文化を考える場合、上述した基層文化として、照葉樹林帯⁸⁾の下に独自に展開し発達したとされる「照葉樹林文化」と呼ばれている文化が、近年では非常に有力な作業仮説

※昭和女子大学家政学部講師

※※麗澤大学外国学部助教授

(working hypothesis)として注目されだしてきた⁹⁾。「照葉樹林文化」に関する一般的な概略は割愛するが、照葉樹林帯には、民族あるいは言語上、その所属する系統が異なる多くの民族集団が居住している。にもかかわらず、この森林帯には多種多岐にわたって共通点¹⁰⁾がみられるのである。

照葉樹林帯は、ネパール・ブータンから華南を経由して、江南の地と称される長江の中・下流にかけて帯状に広範囲にわたって分布している。そして、日本列島西南部がその東端に該当する。このように、日本列島西南部も照葉樹林帯に所属している。しかしながら、「照葉樹林文化」を代表する各種の文化要素が濃厚に分布するといわれている「東亜半月弧」(上山春平・佐々木高明・中尾佐助1976 p.6)とは、氷河時代などの古い時代を除外すれば、東シナ海(東海)などの海洋によって隔離されている。それ故、「照葉樹林文化」を代表する文化要素の多くは、「東亜半月弧」から海を渡って伝播したと推定せざるを得ない¹¹⁾。といっても、「東亜半月弧」で成立したと看做されている個々の文化要素は、要素のみでは渡来することが不可能で、日本列島西南部に伝播するためにはかかる文化要素の担い手たる民族集団が必要となってくる。本稿では、かような民族集団が依拠したかもしくは民族集団とともに日本列島西南部に渡来した人々の中に、漁民の集団存在を想定している。

すなわち、当時としては、外洋を航行する技術を有した集団を伴わなければ、日本列島に渡来できなかったと推定できるからである。とりわけ、山東・浙江両省の沿岸・離島に居住する漁民は、前者に関していえば、山東半島が朝鮮半島の方向に向って突き出していることなどから、朝鮮半島経由北九州へというコースの中間に位置している¹²⁾。後者の場合でも、沖合を日本海流(黒潮)が北上し、日本列島沖に達しているなどの好条件の場所に存在している。かかる意味から、本稿では、漁民が構成員の大部分を占める集落である漁村に関して、可能な限り時系列的に分析することを通して、日本の基層文化の解明の手がかりとしたい。

なお、山東半島の漁村の大半が位置する山東半島は、厳密には照葉樹林帯に所属していない。しかしながら、江南の地から海岸線に沿って北上し、前述の朝鮮半島に渡るのではなく、山東半島経由日本列島(九州)へという伝播コースも推定可能なこと(田畑久夫 1992b p.42)や、山東・浙江両省の漁民は、現在でも相互に交流がある点などから、考察の対象とした。

2. 水産業の発達史と漁区

前項で論じたように、中国の水産業は近年非常な発達を遂げた。しかしながら、その発達史に関しては解明されていない部分も多く存在する。この点についても前項で指摘したことになるが、その理由は、かかる方面での中国人研究者の不足によるものと推定できる。中国人研究者による詳細な漁業発達史を含む水産史の出現が待たれるところである。このような現状のため、わが国においても、中国の水産業の歴史に関する研究書は皆無に近いといった状態である。

以上のように、詳細な分析は今後の研究によらねばならないが、一般に中国においては、人民

第1表 中国における海面水産業の時代区分

区 分	名 称	特 色
I	新石器時代	初歩的段階，採取・釣中心，貝塚の存在
II	夏・商・周代	初期的段階，漁船・漁網の出現
III	秦～清代	沿岸漁業主体（副業的位置），養殖業の出現
IV	清末～人民共和中国成立	専業漁家の出現，生産手段の近代化

〔出所〕 張震東・楊金森編 1983 pp. 6～14を一部修正して作成

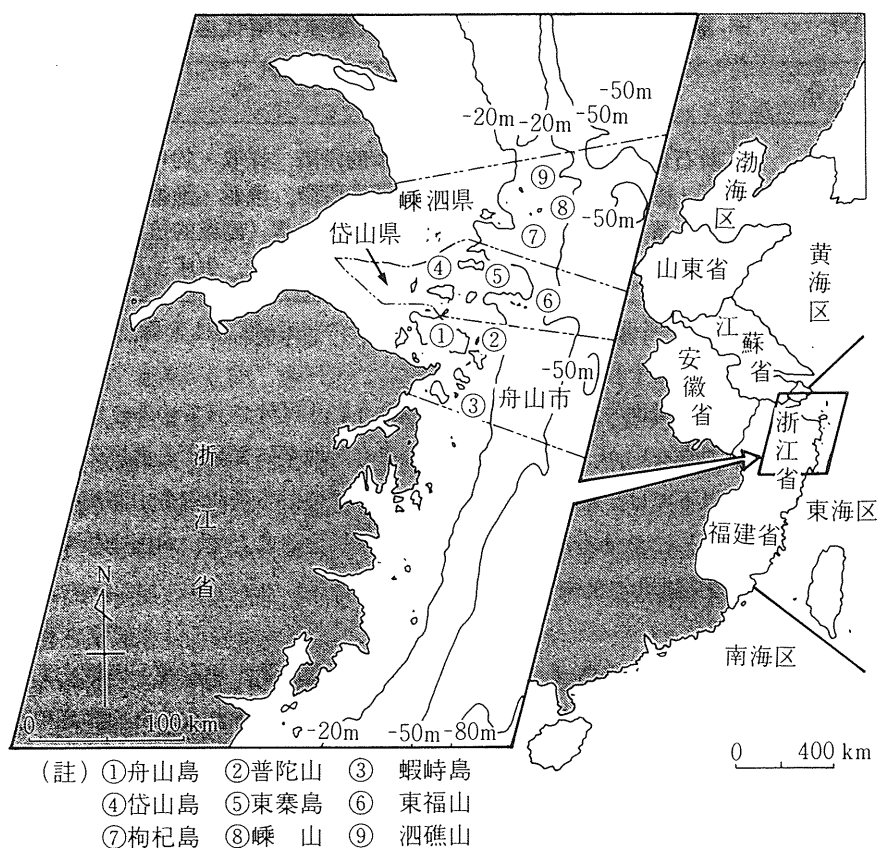
共和国成立までの水産業（海面）の歴史は第1表のように4区分されている。第1表のみからでは直接読みとることができないが，どの時代を通じて，漁業に従事する漁民の生活は困難を窮めていたと思われる。以下では，中国最大の漁場といわれている浙江省舟山諸島（中国では「舟山群島」と呼ばれている）における水産業の発展史を分析することで，中国全体の漁業を中心とする水産発達史の動向を把握していくことにする¹⁴⁾。

1) 舟山諸島の自然

一般に，漁業を中心とする水産業は，農業に代表される他の第1次産業と同様にあるいはそれ以上に，気候などの自然条件に左右されることが非常に大きい。それ故，舟山諸島の水産業に関する時系列的な分析に入る前に，舟山漁業の発達の基盤ともなっているというべき，舟山諸島周辺の自然環境を検討しておこう。

舟山諸島は，北を中国最大の河川である長江河口，南を象山，東を杭州湾によって三方を各々限られる島嶼である（第1図）。これらの島嶼は，前述のように長江河口沖に位置していることなどから，古くは「海中州」とも称された。舟山諸島には，現在96の有人島を含む1,000を越える大小の島々が存在する。海域面積は15万平方キロメートルにも達し，中国最大の面積を有する諸島である。このように，広大で多数の島嶼から構成されるが，諸島中最大かつ中心的な役割を担っているのは舟山島である¹⁵⁾。舟山島は，中国では第4位の面積を有する島である¹⁶⁾。行政上，現在では，この舟山島を中心とした旧定海県と，東側に隣接する普陀山¹⁷⁾を主体とした旧普陀山県とを併せて，舟山市¹⁸⁾と称している。この他，舟山諸島には，岱山島を中心とした岱山県，嵎山島を代表とする嵎泗県が所属している。

前述したように，舟山諸島は中国最大の漁場であると称されているが，理由としては次の2点があげられる。第1点としては，舟山諸島が位置する地形的条件である。すなわち，黄海および東シナ海に面した大陸海岸が，地質学でいう新世代第3紀末期に沈降したときに，海岸付近に点在していた丘陵が山地などの高地が海面に露出し，舟山島・岱山島など現在の舟山諸島を代表する島嶼となったのである¹⁹⁾（《舟山漁志》編写組編 1989 p. 38）。かかる成因によって形成されたため，舟山諸島の平均海面深度はマイナス40メートル内外で，魚類の成育に大変適した大陸棚となっている（雷宗友主編 1988 pp. 16～18）。



第1図 舟山諸島概略図

以上の第1点で指摘した地形条件に加えて、海流が諸島近海を流れていることが第2点として指摘できる。つまり、北太平洋最大の暖流である日本海流の支流で、高塩分を含む台湾海流²⁰⁾と黄河沿岸流²¹⁾および長江河口付近に形成される東海沿岸流が合流する地点が、舟山諸島沖合なのである(《中国自然地理》編写組編 1984 pp. 40～42)。というのは、後者の両沿岸流は、黄河・長江という最大規模の河川から流入する淡水が多量に混入されているため、低塩分で水温も高くない。それ故、これらの海流が合流する海域では、いわゆる「潮目」が形成される。その上、この海域は、長江をはじめ钱塘江・甬江などの大河川の河口沖に位置するため、リン・硅酸などの栄養素に富み、魚類の餌となる動物・植物性のプランクトンが多量に発生しやすいという好条件も備えている²²⁾(《舟山漁志》編写組編 1989 p. 40)。

このような地形および海流を中心とした自然条件に、舟山諸島近海は恵まれている。しかしながら、現在においても、地元の漁民間で広く流布している「捕魚人勿読四書 順曉得大水 小水」という諺に代表されるように、近海では干満の差がとくに激しい。かような1日の潮流の変化は

第2回 舟山諸島近海における潮流の変化

順序	潮流名称	潮流方向	潮力強弱	
			最小（干潮）	最大（満潮）
1	東北水	西南流		
2	東 水	西 流		
3	東南水	西北流		
4	南 水	北 流		
5	西南水	東北流		
6	西 水	東 流		
7	西北水	東南流		
8	北 水	南 流		

〔出 所〕 《舟山漁志》編写組編 1989
p.143より作成

「八卦潮」と称される。舟山諸島では、それぞれの潮流の流れに従って、第2図にみられるような名称がつけられていた。それ故、流網・張網などを主とする木造機帆船による伝統漁法の場合、操業上多くの制約が存在した。

2) 漁村発達史

舟山諸島近海は、前項で指摘したように、非常に優れた自然条件を具備していた。このような特色を有する舟山諸島の水産業はどのように発展してきたのであろうか。水産業の中心と思われる漁業を事例として、その発達史を検討していこう。

とはいうものの、舟山諸島は、1840年代初頭に勃発したアヘン戦争のとき、一時イギリス軍に占領されるという事態が生じた。そのため、島民の大半が大陸に移動してしまった。かような大混乱に陥ったため、諸島内の史料はほとんど散逸してしまった。したがって、史料上、多くの制約が存在するので漁業発展史に関しては詳細が不明な部分が多い²³⁾。

このように、文献などを含む諸資料が大変欠如しているのであるが、舟山諸島の漁業発展に関しては、前項でも参照した書物をはじめ中国側の研究書が既に存在する（《舟山漁志》編写組編1989、張辰東・楊全森 1983 など）。以下では、これらの著書の記述を参考にしながら、筆者らの現地における聞き取りなどの知見をも加えて考察してみよう²⁴⁾。舟山諸島の漁業発達史は下記のように、大きく(A)～(F)の6期に区分できる。各々の時代とその特色を順次述べていくことにする。

(A) 魚介類採取期。現時点までにおいて、舟山諸島では20ヶ所を越える地点から、新石器時代の遺跡・遺物が出土している。これらの遺跡址などの発掘調査の結果から、紀元前約4,500年ころには、主要な島々には既に人々が居住し、魚介類を採取していたことが確認されている。当時の島民は、主として海岸線沿いに居住し、共同使用の漁場（磯場）を共有していたようである。また、ごく初歩的な網や竹製の簍なども使用されていたらしい。主要な漁場は潮が引いた海岸線付近一帯で、主としてエビ類と貝類が捕獲対象であった。しかし、漁業を専業としているものは存在しなかったようである。この期間は大変長く、数千年間に及んだと推定されている。

(B) 沿岸漁業期。7世紀ごろより、海岸沿いでの採取中心の漁撈から、沿岸での小型漁船による操業が実施されるようになった。その結果、半ば自給自足的な生活を営んでいた島民の間でも、この期になると、小規模ではあるが漁撈を専門に行なうものも出現してきた。とりわけ、738年に舟山県が成立²⁵⁾すると、諸島内の秩序が非常に安定したため、飛躍的に漁獲量が増加するこ

とになった。漁場も早朝に出かけて夜には帰ってくるという、日帰り圏にまで拡大した。また、これらの授業は個人が単独で実施するのではなく、数人が共同して行なうようになった。漁業に関しても、流網などに進歩がうかがえた。漁獲物は、大黃魚 (*Pseudosciaena crocea*)・小黃魚 (*Pseudosciaena polyactis*)・帶魚 (*Trichiurus haumela*) など、現在捕獲されているほとんどの魚類が含まれていた。

(C) 操業禁止期。前期にみられた操業も、明代およびその後の清代初期には、海賊の取締りなどのため、国策として舟山漁場での操業は一切禁止された²⁶⁾。それ故、諸島内に居住する漁民もこれに従わざるを得なかった。漁業後退期である。

(D) 沿岸漁業復興期。1648年の出漁業禁止解除後、舟山諸島への入植も認められ、多くの人々が新たに舟山諸島に來住した。その後、18世紀の前半には、岱山・長涂などの島嶼でも漁業が再開された。さらに、1830年代より、隣接する福建省より釣船が島内に出没するようになり、廟子湖・東福などの島々に漁民が定着し、漁村を形成した。この時期が全盛期であったが、長く続かず、前述したアヘン戦争の影響を直接受け、操業は一時遮断されることになった。

(E) 沖合漁業期。1840年代に入ると、アヘン戦争の後遺症も一段階した。すると、大陸などに一時避難していた旧島民も島嶼に戻り、漁業も再開された。この期の操業は、数日間舟山諸島近海で漁業に従事する沖合漁業が主体となった。その理由としては、①水産物に対する需要の高まり、②潮流・気象などに関する科学的知識の普及、③漁船の大型化におよび定置網に代表される漁法の発達、④象山・鄞県・奉化など近くに位置する漁業先進地域に居住する漁民の來島などによるとされる。その全盛期であると看做される1935年には、この海域でトロール（底引き）漁船500対²⁷⁾、3人乗りのイカ網船420艘、6～8人乗りの流網船などを中心に総計2,530艘の漁船が操業するなど、非常に繁栄していた。この期間は日中戦争勃興期まで続いた。

(F) 木造機帆船による操業期。1950年における舟山諸島の解放後、合作社などが設置され、漁船の機械化も進んだ。とくに、漁業隊が形成され出した1956年に機帆船の造船が開始され、1967年には舟山諸島の漁船はすべてこの型式になるなど、漁船の動力化がみられた。さらに、1963年には、国营舟山海洋漁業会社が、1979年には日本企業との合資形態をとる舟山市第2海洋漁業会社が設置されるなどして、近代的な操業システムで漁撈が実施されることになり、漁獲も増大した。また、漁場も遠洋まで拡大した。なお、近年においては、対蝦 (*Psmaeus orientalis*) と呼ばれるエビの一種の養殖や、鋼鉄製漁船（冷凍設備内蔵）の建設も進められており、日本など外国への水産業の輸出も開始されている。

3) 漁区

舟山諸島における漁業に代表されるように、中国の水産業には長い歴史が存在する。このような伝統を有する漁撈が実施されている空間が漁場である²⁸⁾。すなわち、漁場とは、一般に漁法と称されてい種々の生産手段によって、主として魚族を捕獲する水域であるといえる（田畑久夫 1989 p.9）。漁区の具体的な分析に入る前に、漁場の一般的性格を検討しておこう。

以上論じた点に特色づけられる漁場は、山民²⁹⁾が狩猟を実施する場合の狩場や、農業の場合

の水田・畑地などの耕地とはほぼ類似した機能をもつと考えられる。しかしながら、漁場は、基本的には後者とは類似性が認められない。というのは、水田・畑作に代表される耕地の場合、第1点として、ある一定期間単一の作物を栽培することがその基本的性格であること、第2点としては、先祖代々、特定の場所に定着して居住するという定着性、およびこの空間を同様に代々使用するという永続性が認められることである。一方、これに対して、漁場の場合、前者に関しては漁獲対象物である魚種は、種々の条件——主として前述の自然条件——により単一の魚族とは限定されないこと、後者については、乱獲に代表される資源の枯渇で絶えず移動しなければならないという事実が各々存在し、性格を大いに異にしている。かような独自の性格を有しているため、漁場は、その成立のために経済的な合理性が要求されるのである。それ故、経済効率の優れている特定の水域が漁民の間で競合することになることが多い。漁区とは、このような性質をもつ漁場を、ある特定の水域単位として、行政的（人為的）に分割した領域であると看做される。中国の場合、淡水漁業を除く水産業は、黄海および東シナ海に面している浙江・山東・福建・江蘇の4省に集中する。この4省だけでも、例えば1985年度には、全国の総漁獲量の半分近くを占める（第2表）。一般には、漁場は北から南にかけて次の4つに区分されている³⁰⁾（第1図）。

第2表 おもな省における水産業の概況（1985年）

	総漁獲量	うち海面漁 獲量の比率	漁業郷 (公社)	漁業村 (大隊)	漁業生産隊	専業漁家	漁業就業者 人口
全 国	7,051,755t (100%)	59.5%	400ヶ所 (100%)	4,730ヶ所 (100%)	17,829ヶ所 (100%)	1,129,487戸 (100%)	4,703,354人 (100%)
浙江省	1,048,210 (14.9)	21.2	122 (30.5)	966 (20.4)	7,425 (41.6)	220,545 (19.5)	838,934 (17.8)
江蘇省	675,354 (9.6)	5.7	46 (11.5)	771 (16.3)	0	112,919 (10.0)	389,649 (8.2)
山東省	814,047 (11.5)	17.4	43 (10.8)	414 (8.8)	785 (4.4)	123,418 (10.9)	399,547 (8.5)
福建省	760,601 (10.8)	17.0	28 (7)	454 (9.6)	5,919 (33.2)	297,543 (26.3)	1,501,334 (31.9)
安徽省	173,113 (2.5)	0	26 (6.5)	172 (3.7)	770 (4.3)	205,545 (1.8)	84,711 (1.8)

（註）（ ）内は対全国比のパーセント 【出所】 中華人民共和国農牧漁業部編 1986より抽出作成

a. 渤海区。この海区は、遼東半島と山東半島とに囲まれた内湾にはほぼ一致する。そのため、大陸から流れ込む黄河・遼河などに代表される大河川の影響を年中受けることになる。すなわち、上流より運搬されてきた大量の土砂が内湾海底に堆積する。その結果、4海区中では、平均海面深度がもっとも浅い。このため、水温の季節的変化が著しく、最低を記録する1月では平均気温が摂氏0度以下、最高となる9月では平均気温が摂氏24～27度にまで上昇する。とくに冬季にあたる12月下旬から2月にかけては、湾内が完全に凍結し、漁船が航行不可能になるので、操業は

完全に停止される³¹⁾。

主要漁場は沿岸一帯と、前述した湾に流入する河口沖である。漁法としては、前者では小型の定置網、後者では流網などを中心に操業が実施される。主要漁獲物としては、小黄魚・帶魚・鰯魚 (*Ilisha elongata*) をはじめとする各種類の魚類・エビ類などがあげられる。エビ類の中でも、とくに対蝦・毛蝦 (*Acetes chinensis*) は渤海湾の特産物として有名である。

b. 黄海区。山東半島から長江河口までの区域である。海底は平坦部が大部分を占めるため、トロール漁には最高の漁場となっている。またこの海域では、例えば3月には北西風、4月には東南風というように季節によって風向きが大きく変化するので、海流や水温の変化が著しい。そのため、多くの魚類の産卵所や回遊場所となっている。主要漁場は、西朝鮮湾に流入するヤール川 (鴨緑江) の河口デルタおよび山東半島先端の2ヶ所である。主要な漁獲物としては、小黄魚・黄姑魚 (*Nibea albifora*) ・帶魚などの魚類が中心となるが、特産物としてはナマコ (*Stichopus japonicus*) があげられる。なお、かつては捕鯨も大規模に実施されていた。現在では、トラフグ (*Fugu vermicularis*) など捕獲され、日本に輸出している³²⁾。

c. 東海区。舟山諸島・台湾海峡を中心とする中国有数の漁場があるので、中国最大の漁獲量を誇る漁区となっている。この海域には長江や钱塘江などの主要河川が流入し、水質はすこぶる良好といわれている。また、寒・暖流の合流点ともなっており、プランクトンなどの水産資源にも恵まれている。そのため、大黄魚・小黄魚をはじめとする高級魚の漁獲も多い。

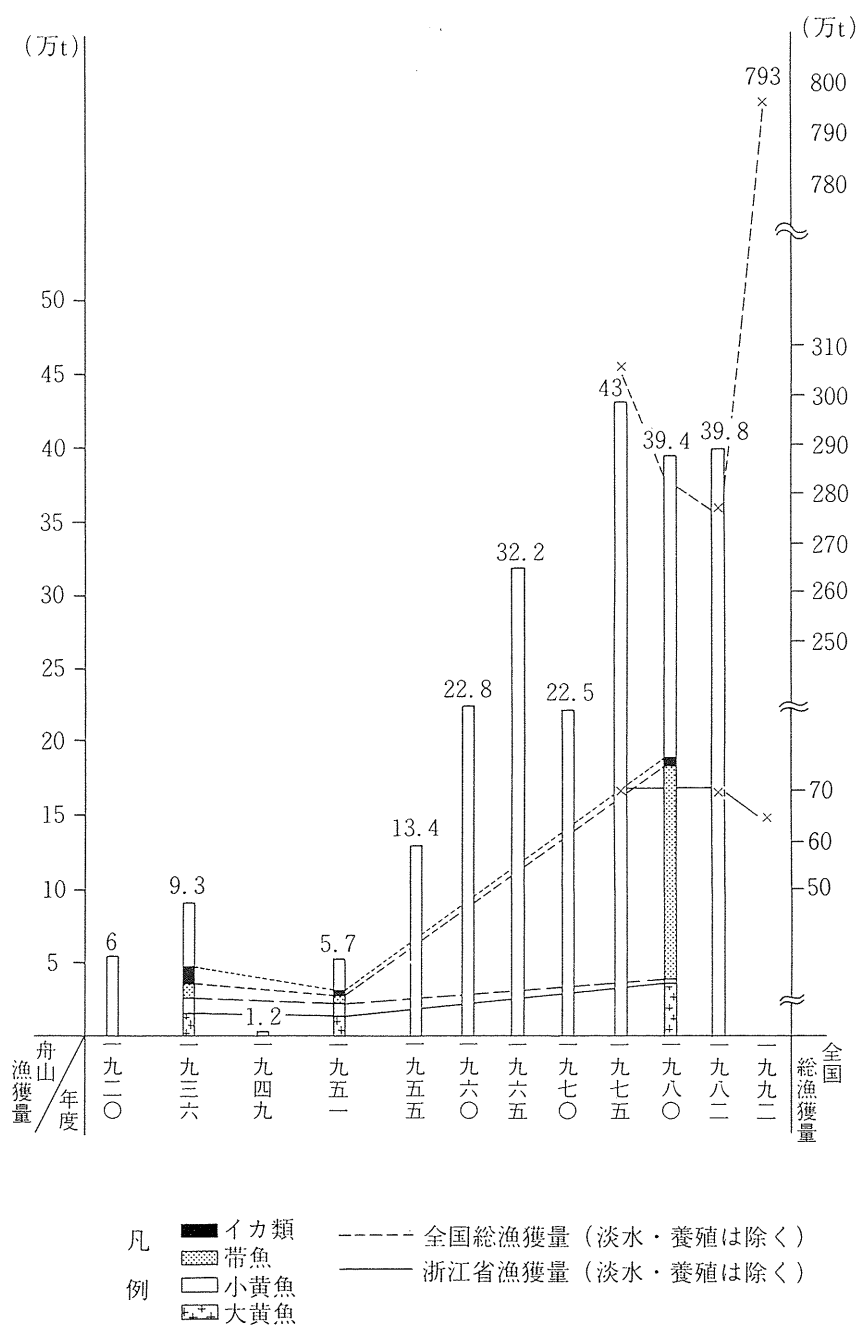
d. 南海区。台湾より南方の広大な海域を占める。冬季でも摂氏20度を越える場合が多い。そのため、黄鰐 (*Taius tumifrons*) などの亜熱帯性の魚類を主体に、海ガメ (*Chelonia mydas*) ・梅花参 (*Thelenote ananas*) と称されるナマコ類の1種や、薬草の原料となる海人草 (*Digenea simplex*) など豊富である。

3. 主要漁種と生産手段

1) 主要魚種

中国における海面漁業は、前項でも論じたように、北は黄海・渤海湾から南は南シナ海 (南海) に到る広範囲にわたる水域において実施されている。したがって、それぞれの水域においては、非常に多くの魚族が棲息している (第3表)、本稿では、発達史と同様に、舟山諸島近海を事例としてとりあげ、論じていくことにする³³⁾。

舟山諸島では、第3表に示した魚介類を含めて、100種を越える魚種が捕獲されている。これらの魚介類を捕獲する水域つまり漁場は合計17ヶ所にも及んでいる。漁場は、舟山諸島近海および大陸沿岸の2ヶ所を中心とする中・小規模の中国でいう「沿岸漁場」と、東シナ海上にある大規模な水域を占める中国でいう「海場漁場」とに大きく2分できる。両漁場では、捕獲される魚種がまったく異なっているという特色がみられる。すなわち、「沿岸漁場」では、大陸沿岸沿いを巡回する大黄魚・小黄魚・帶魚・鰯魚およびイカ類などを代表とする回遊魚の捕獲が中心であ



〔出所〕《舟山漁志》編写組編1989 p.56表2・7

中国国家统计局編1993などより作成

第3図 舟山諸島における漁獲量の推移

第3表 主要漁獲物とその漁物

中国名	学名	和名	主要漁場
大黃魚	<i>Pseudosciaena crocea</i>	フウセイ	舟山, 温州, 雷州半島
小黃魚	<i>Pseudosciaena polyactis</i>	キグチ	温州, 舟山, 嵊山, 呂泗, 煙台, 渤海
白姑魚	<i>Argyrosomus argentatus</i>	コイチ	渤海, 石島, 連言港, 舟山, 温州, 北部湾
鮫魚	<i>Mitschthys miuy</i>	イシモチ	煙台, 威海, 長江口, 舟山, 温州
黃姑魚	<i>Nibea albiflora</i>	ニベ	渤海, 長江口, 温州
帶魚	<i>Trichiurus hamela</i>	タチウオ	萊州湾, 長江口, 舟山, 温州, 平漂, 粵西上下川
鰱魚	<i>Stromateoides argenteus</i>	マナガツウオの一種	浙江, 北部湾, 黄海南部
髯鯛	<i>Haplogenyus mucronatus</i>	セトダイ	長江口, 浙江
金綫魚	<i>Nemipterus virgatus</i>	イトヨリ	東海南部, 海南島, 北部湾
刺鰷	<i>Pseudopsis anomala</i>	イボダイ	福建, 広東
魷魚	<i>Paralichthys olivaceus</i>	ヒラメ	渤海, 鴨綠江口, 東海北部
鰈魚	<i>Pleuronichthys cronatus</i>	カレイ	渤海, 海洋島, 成山頭, 長江口
鰻魚	<i>Ilisa elongata</i>	ヒラ	渤海, 呂泗, 汕頭, 佛山, 淇江
鮎魚	<i>Pneumatophorus japonicus</i>	ホンサバ	煙台, 威海, 海洋島, 浙江
鱈魚	<i>Gadus macrocephalus</i>	タラ	石島, 成山頭
鰹魚	<i>Scomberomorus niphonius</i>	サワラ	渤海, 黄海北部, 舌山, 汕頭, 惠陽, 佛山, 湛江
魴魚	<i>Lepidotrigla microptera</i>	エイ	渤海, 鴨綠江口, 黄海中部, 長江口
海鰻	<i>Muraenesox cinereus</i>	ハモ	長江口, 舟山, 魚山, 温州, 福建
蛇鰻	<i>Saurida elongata</i>	エソの一種	長江口, 海南島東部, 北部湾
鰮魚	<i>Mugil so-inuy</i>	イシゴイ	浙江, 渤海
鮎魚	<i>Lateobrax japonicus</i>	スズキ	山東沿岸, 長江口
鰻魚	<i>Engraulis japonicus</i>	カタクチイワシ	遼寧, 浙江, 福建
角鰻	<i>Squalus acanthias</i>	アブラツノザメ	浙江, 山東
犁頭鰻	<i>Sphyrna spp.</i>	シュモクザメ	長江口, 大陳島
黃鰻	<i>Setipinna taty</i>	ツマリエツ	渤海, 黄海北部, 長江口, 浙江
老板魚	<i>Raja porosa</i>	アカエイ	遼寧, 山東, 広東
河豚魚	<i>Fugu vermicularis</i>	トラフグ	煙台, 浙江, 江蘇, 広東
金鰐魚	<i>Thunnus tonggol</i>	マグロ	海南島南部, 西沙群島
鰹魚	<i>Katsuwonus pelamis</i>	カツオ	海南島南部, 西沙群島
鰯魚	<i>Platycephalus indicus</i>	コチ	山東高角, 青島, 長江口
青鱗魚	<i>Harengula zunasi</i>	コノシロ	全国沿岸
馬面鰱	<i>Navodon septentrionalis</i>	ウマズラハギ	全国近海
太平洋鰱	<i>Clupea pallasii</i>	ニシン	胶東沿岸
墨魚	<i>Sepiella esculenta</i>	コウイカ	黄海南部, 舟山, 温州, 汕頭, 北部湾
無針烏賊	<i>Sepiella maindroni</i>	シリヤケイカの一種	全国沿海
石斑魚	<i>Epinephelus spp.</i>	イシモチ	南海, 東海
牡蠣	<i>Cstra plicatula</i>	カキ	福建, 広東, 山東, 遼寧沿海
縵蛭	<i>Sinonovacula constricta</i>	アゲマキガイ	浙江, 福建沿海
毛蚶	<i>Arca subcrenata</i>	バイガイの一種	山東, 浙江, 海南島
四角蛤蜊	<i>Macra quadrangularis</i>	ハマグリ	渤海, 浙江象山, 海南島
貽貝	<i>Mytilus edulis</i>	イガイ	大連, 浙江沿岸, 汕頭, 海南島
扇貝	<i>Patinopecten yessoensis</i>	ホタテガイ	長山島, 老鉄山, 石島, 嵯島, 江蘇
鮑貝	<i>Haliotis discus haunai</i>	アワビ	大連, 長山島, 福建東山, 海南島
对蝦	<i>Penaeus orientalis</i>	タイショウエビ	石島, 成山島, 煙台, 威海, 乳山口, 渤海
毛蝦	<i>Aetes chinensis</i>	オキアミの一種	渤海, 舟山, 浙江南部, 北部湾
鷹爪蝦	<i>Trachypenaeus curvirostris</i>	——	胶東沿岸
白蝦	<i>Palaemon carinicauda</i>	テナガエビの一種	渤海各河口
梭子蟹	<i>Portunus tribereklatus</i>	ワタリガニ	遼東半島, 山東半島, 江蘇, 浙江, 福建, 広東沿岸
海帶	<i>Laminaria japonica</i>	コンブ	旅大, 山東半島沿岸
紫菜	<i>Porphyra tenera</i>	アサクサノリ	山東沿岸, 嵯泗列島, 福建沿岸, 海南島
海龜	<i>Chelonia mydas</i>	アオウミガメ	広西, 海南島
梅花參	<i>Thelenota ananas</i>	バイカナマコ	海南島, 広東
龜足	<i>Mitella mitella</i>	カメノテの一種	浙江, 福建
海人草	<i>Digenea simplex</i>	マクリ	福建, 広東, 広西
裙帶	<i>Undaria pinnatifida</i>	ワカメ	全国沿岸

〔出所〕 張震東・楊金森編 1983 pp. 196~199などより作成

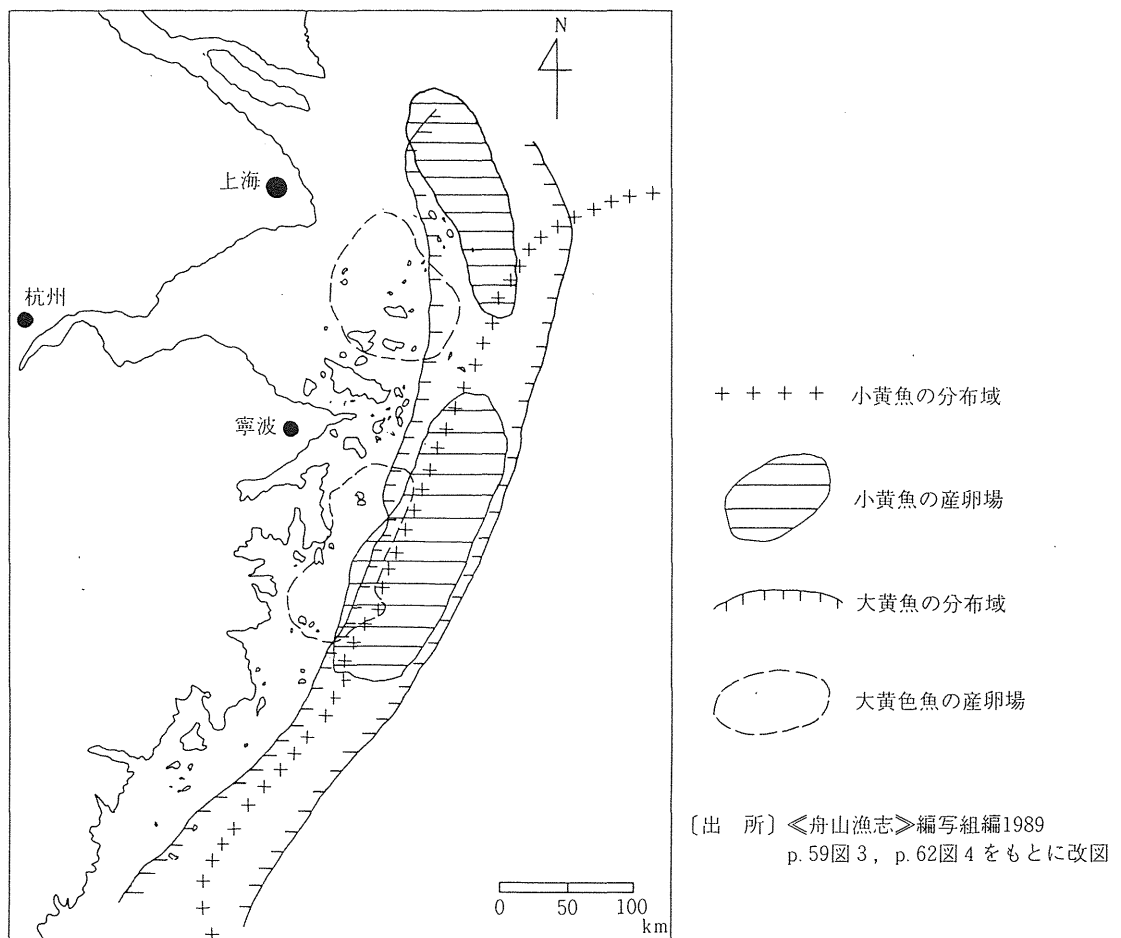
る。これに対して、「海洋漁場」では、鮎魚（*Pneumatophorus japonicus*）・馬面鈍（*Navodon septentrionalis*）をはじめとする東シナ海に棲息している大衆魚の捕獲が主体となっている。

以上のような漁場で、どのくらい漁獲をあげていたのでしょうか、その推移を示したのが第3図である³⁴⁾。漁獲量は、人民共和国成立以前には、10万トンに近づいたが、戦争の被害を大きく受け、水産業は全滅したといわれたほどであった。しかしながら、戦争終了後、漁業を含む水産業は徐々に回復を続け、順調に発展するかのようになっていった。ところが、1966年より開始されたプロレタリア文化大革命の影響を受け、その全盛期にあたる1970年には総漁獲量が文革以前の3分の2近くに急減した。その後、再度、総漁獲量は増加しだし、1975年以後は40万トン前後の実績をあげている。なお、この40万トンという数値は、淡水を除く浙江省の総漁獲量の5割以上を占め、舟山諸島近海の漁場としての優位性を示している。しかしながら、最近10数年間の漁獲量の具体的な数値は公開されていないので不明であるが、現地での聞き取りなどを総合すると、ここ数年来極端な不振が続いている。

舟山諸島では、伝統的に大黃魚・小黃魚・帶魚およびイカ類を「4大経済魚類」と称し、もっとも重要な漁獲物としてきた³⁵⁾。しかし、これらの魚種の中でも、帶魚は漁獲量が増加したものの、小黃魚・イカ類は減少が著しい。その理由は、とくに経済的価値の高い小黃魚・イカ類の乱獲が進んだためといわれている。以下では、このような一般的な性格を有する舟山諸島の漁業であるが、「4大経済魚類」に焦点を合わせて、それぞれの特徴を検討してみよう。

大黃魚。大黃魚は、主として大陸沿岸部や舟山諸島近海など、大陸近くの水域に棲息している（第4図）。その理由は、大黃魚が暖水性の回遊魚のため、暖流の台湾海流の流路とほぼ一致するためであるといわれている。中国では、昔からこの魚が大変珍重され、「家魚」（国家を代表する魚）とも称される。捕獲時期は立夏より夏至にかけてで、ちょうど産卵期と一致する。産卵の特色は、産卵中にメスが低いうなり声を発すると、オスもこれに呼応して同様のうなり声を出す。その様子はまるで水田でカエルが鳴いているかのようだという。それ故、漁民の間では、この鳴き声の大小により、魚群の濃淡を判断することができるのである。漁場は、以前では南の福建省近くの沿岸が中心であったが、現在では舟山諸島北部の海域に移動している。捕獲手段としては、木造機帆船によるトロール漁が主体であった。しかし、乱獲がみで、とくに1960年代以降の水揚げ高は落ち込んでいる。捕獲された大黃魚は、うす塩をした後、天日で乾燥して出荷される³⁶⁾。

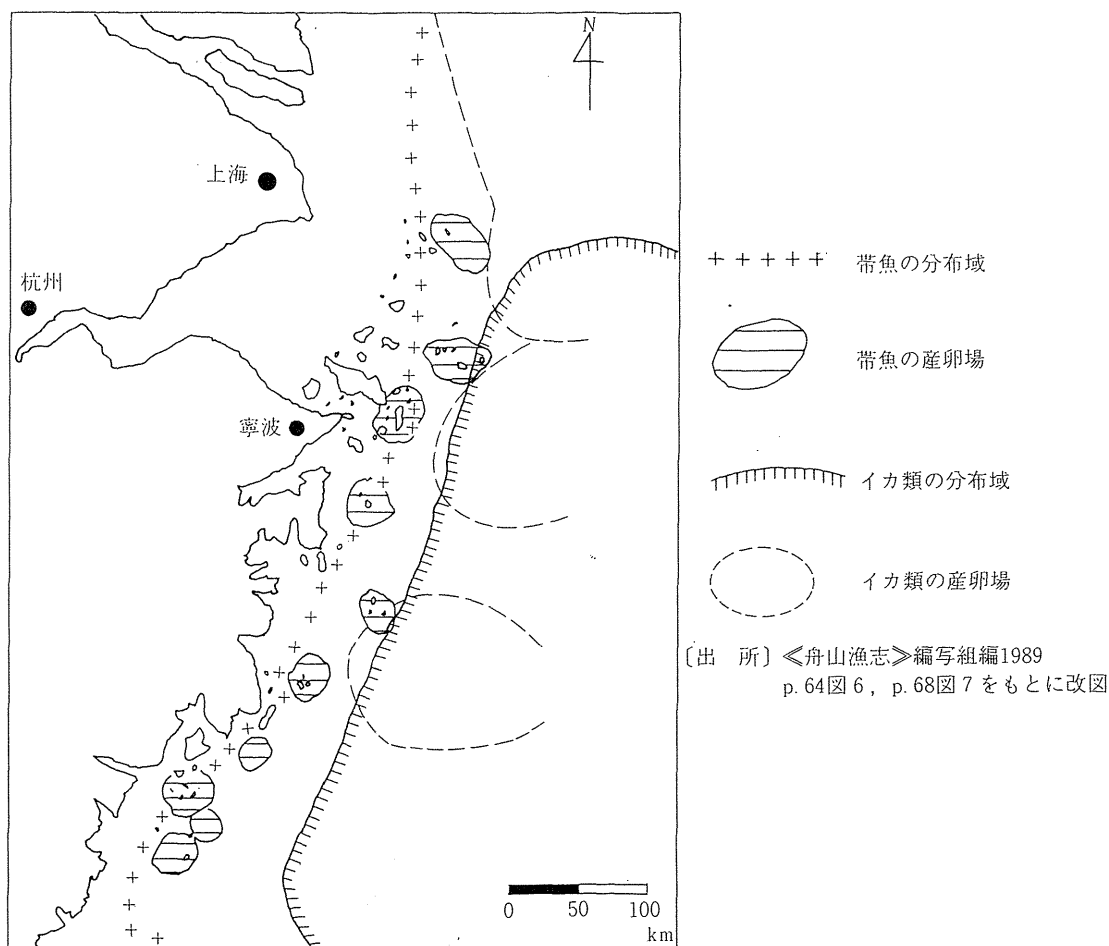
小黃魚。小黃魚は水色が透明で、水深30～60メートルの海底に棲息する。そのため、第5図にみられる如く、大黃魚より沖合に分布する。漁場は、舟山諸島近海および大陸沿岸部に数ヶ所存在する。しかし、前述のように漁獲量は減少を続け、とくに1970年代以降は極端に減少している。産卵期には、大黃魚と同様のうなり声をオス・メスともあげるといった特徴もみられる。漁獲は、3～5月を中心とする産卵期と、9～12月の秋季を中心とした季節の2回実施される。舟山諸島では、小黃魚のことを「報春魚」（春を告げる魚）と呼ばれていることから推定できるように、捕獲中心は前者である。操業は小型の木造期帆船によるトロール漁である。捕獲された小黃魚は、大黃魚と同様に干魚とされることが多い。



第4回 大黃魚・小黃魚の分布範囲および産卵場

帶魚。魚群分布は大陸に沿って南北方向に並ぶ（第5図）。その分布状態は産卵場とほぼ一致するが、産卵場は小さな島嶼近海の浅海に限定されるという特色をもつ。舟山諸島近海には、立冬前後に越冬のためにやってくるので、伝統的には冬季が捕獲期となっていた。それ故、地元の漁民の間では「小雪小捕 大雪大捕」（小雪であれば少ないが、大雪であれば大漁）という諺が広く流布している。舟山諸島においては、他の主要魚種の漁獲量が横ばいもしくは下降傾向を示すのに対して、近年漁獲量の増加が著しい。とくに、帶魚は舟山諸島では魚種別では最高の水揚げ高を誇っている。操業は従来より、「背舢」³⁷⁾あるいは「小対」³⁸⁾と呼ばれる木造船で実施されている。前者が使用されるのは冬期のみで、主として延縄漁に用いられる。後者の場合は、秋季に利用されることが多かったが、近年では、年間を通して、この型の漁船によるトロール漁が目立つ。帶魚は、天日に7～10日間ほど干す「咸帶魚」として出荷されることが多い。

イカ類。舟山諸島近海では、金烏賊（*Sepilla esculenta*）・無針烏賊（*Sepiella maindroni*）の2種類を中心に捕獲されている。魚群分布・産卵場は第5図にみられるように沖合である。この



第5図 帯魚・イカ類の分布範囲および産卵場

点は、主として近海に分布・産卵する帯魚とは好対照となっている。漁期は一般に夏季が中心であり、かつては竹製の籠を海中に沈めて捕獲していたが、現在では曳網主体で漁火を燈して夜間に操業される。しかし、近年はその減少が著しい³⁹⁾。捕獲されたイカはほとんどスルメに加工され、中華料理の高級素材として各地に出荷される。

2) 生産手段

魚介類を捕獲することを主目的としている漁業は、農業をはじめとする他の第1次産業と比較すれば、非常に特異な位置を占めているといわざるを得ない。すなわち、開発の歴史が比較的新しい水産養殖を除外すれば、生産の対象となる魚介類は前項でも指摘したように、常に移動している点である。それ故、かような主要対象物の可動性は、漁民に対して農民以上に、習性などに代表される非常に広範な専門知識を必要とする。また、漁具・漁撈などの生産手段に関しても、かような対象物の諸特性に最適なものが工夫・考案され、発展してきたといえる。かかる事実、例えば動力船の普及などにより、生産手段が従来よりも大きく変化しても、なお生産手段は自然

的條件の支配下に置かれていることを意味している。そのうえ、とくに近年において、漁網における合成繊維の使用、魚探の普及など生産手段の近代化による乱獲の結果、資源の枯渇も目立つ。この対策として、日本などの水産先進国といわれている国々では、例えば、最新式漁法と称されているトロール漁を規制したり、漁網のます目の大きさを制限するというような事態にまで進展している。つまり、人為的な条件が生産手段を規制するという状況になっている。

このような一般的な特色をもつ生産手段は、上述したようにまず海流や海底などの自然条件に大きく左右される。その結果、多様な形態の生産手段が生み出されてきたのである。本稿では、種々の生産手段のうち、対象物である魚介類を捕獲する手段である漁具を主体に、考案をすすめていくことにする⁴⁰⁾。中国において使用されている漁具を整理・分類すると第4表ようになる。第4表を参照して、各々の漁具を概観しておこう⁴¹⁾。

海面で使用される生産手段としての漁具は、中国では日本と同様に、網で対象魚介類を捕獲する網具、釣針を使用する釣具、およびその他の漁具を用いる雑具の3種類に大きく分類されている。

抄網とは、主として小型の魚類・エビ類をすくいあげる網のことで、わが国では「たも網」と称している。通常、漁船の船首などに設置された焦魚燈を灯し、その光源に集合した魚族を網で捕獲する。抄網に属する網としては、山東半島先端の沿岸一帯で毛蝦を捕獲するときに広く用いられている「推網」（「叉手網」）などがあげられる。

敷網漁は、網を水中にあらかじめ敷いて置き、捕獲対象とする魚族を自然に、あるいは焦魚燈やまき餌により網の中に追い込むという漁法である。福建省・広東省など南方の漁場に多くみられる。

建網は、魚族が遊泳すると推定される地点に、固定されて設置された網である。わが国の「定置網」はこの中に入る。中国では、張網・挿網・陷阱網に3分類される。張網は、更に網が固定される場所などにより、柱張網・掬張網・船張網に細区分される。すなわち、柱張網は、木製の杭などを海底に打ち込み、その先端を縄で結び、魚族の遊泳通路つまり魚道に網を固定するのである。なお網の下には石などのおもりを付け、海中での深度を調節している。このタイプの網としては、渤海梭子網が代表で、数百年の伝統があるという。しかし、主要対象物である毛蝦以外に、他の小魚・稚魚などの雑魚も捕獲してしまうため、現在では夏季の漁期が終了してしまうと禁止されている。また、舟山諸島では、この杭を間隔をあけて2本打ち、同様に縄の先端に網を付けたものを双椿張網と呼び、伝統的な漁法とされている。掬張網とは、1つまたは複数の錨を海底に打ち込み、その先端に網を固定するもので、形式としては前者とほぼ同じである。ただ相違する点としては、錨を使用するために、移動が容易なこと、前者よりも規模が大きいことである。船張網は、2艘の漁船によって海中に沈めた網を固定させたもので、大河川の河口付近の内湾などによくみられる。

挿網は、わが国でいう「魷」に類似した形態の網である。主要漁場としては渤海湾岸で3～5月、8～11月にみられる。干満の差などを利用することから、後述の迷陷類に入れる場合もある。陷穿網は、大型の落とし網で、主として沖合に設置される。

第4表 中国における主要漁具とその漁獲物

海洋漁具	網具	抄網類	-----	魷魚 ⁽¹⁾ (広西)・鯷魚 (福建)・毛蝦 (山東)
		掩網類	-----	魷魚 ⁽¹⁾ (福建)・鰻魚 (広東)
		敷網類	-----	鰻魚 (福建)
		建網類	張網類	桩張網 ----- 毛蝦 (山東)・黃姑魚 (山東)・墨魚 (浙江)
				撈張網 ----- 大黃魚・小黃魚 (江蘇・遼寧)
				船張網 ----- 鰻魚 (江蘇)
			插網類	----- 鰻魚 (山東)
			陷阱類	----- 黃姑魚 (山東)・雜魚 (遼寧)
		刺網類	定置刺網	底刺網 ----- 对蝦 (山東)・鮮魚 (山東)
				飛魚 ⁽²⁾ (山東)
			浮刺網	----- 鰻魚 (広東)
			囲刺網	
			流刺網	底流刺網 ----- 金綫魚・鮐魚 (浙江)
				浮流刺網 ----- 鮐魚・鰻魚・鰻魚 (山東)
			拖刺網	----- 海鰻 (広東)
	囲網類	單船囲網	-----	小黃魚 (山東)・鮐魚 (浙江)
			-----	帶魚・大黃魚・小黃魚 (福建)
			-----	鮐魚 (広西)
	拖網類	雙船拖網	-----	鮮魚 (遼寧)・帶魚 (浙江・山東)・金綫魚 (広東)
			-----	对蝦・鷹爪蝦 (山東)・墨魚 (浙江)
			-----	黃姑魚・鰻魚 (河北)
	釣具	竿釣類	-----	鰻魚 (広東)・鮐魚 (山東)
			-----	鰻魚 (福建)
			-----	金鈎魚 (広東)
		延縄釣類	餌釣延縄釣	----- 帶魚 (浙江など)
			空釣延縄釣	----- 鮐魚・鰻魚 (河北)
	雑具	釣刺類	-----	鰻魚 (浙江)
		迷陷類	-----	鰻魚 (江蘇)・雜魚 (各地)
		壺籠類	-----	墨魚 (浙江)
		靶具類	-----	海苔 (山東)・蛤蜊 (山東)

(註) ①シリヤケイカの別名

②燕鰻魚 *Cypsilurus aguou* の別名

() 内は省または自治区

[出所] 張震東・楊金森編 1983 p116 などより作成

刺網は、魚道に設置し魚を刺してとる網のことである。網を設置する場所が固定されている場合定置刺網と称し、それには海底（底刺網）と海中（浮刺網）に設置する2種類がある。その他、刺網を円形に包囲した囲刺網、船に網の先端から出た縄を結ぶ流刺網、漁船によって曳かれる拖刺網など多種の刺網が存在する。

囲網とは、対象魚類を包囲して捕獲する網の総称である。わが国では「施網」と呼ばれている。この網を用いる漁法も中国では古くから実施されており、200年にもわたる伝統があるとされる。網を包囲するとき使用する漁船の数により3種類の区分がある。操業は一般に沖合で実施され、大規模となる場合が多い。

拖網は、わが国で「曳網」と呼ばれている網をさす。この網を用いる漁法は、網を曳く動力が人か船かによって大きく2分される。すなわち、前者が地曳網、後者は船拖網と称される。なお船拖網の場合、曳く漁船が1艘か2艘かによりさらに2分されている。拖網が使用される漁場は、海底が平坦なうえに、傾斜が緩やかでしかも底棲魚が豊富であるという海域が選ばれる。これらの3条件を充足する漁場としては、大陸に沿って発達している大陸棚が最適であるといえる。それ故、中国においては、現在もっとも用いられている漁具となっている。なお、船拖網は、漁区における地域差が少ないこともその特色となっている。

釣具も、既に論じたようにその起源は古く、陝西省西安郊外の半坡村遺跡からも魚骨でつくられた釣針が出土しているほどである。釣針を付けた釣糸をどこに固定するかによって、わが国同様、竿釣・手釣・曳網釣（漁船が釣糸を曳く）の3タイプに大きく区分できる。さらに、曳網釣の改良されたものとして1本の釣糸に多数の釣針を付けた延縄釣がある。主要対象魚類は第4表にみられるように、それぞれの用途により異なっている。

その他の漁具としては、釣刺・迷陥・壺籠・耙具があげられる。釣刺は、大型の魚類を捕獲するための専用の漁具である。竹の柄の先端にロープを通した釣刺を付け、対象魚類が数メートル以内に接近すると、竹の柄を振り回して魚の腹部などに釣針をつきさす。つきささると、柄の部分が釣針から離れ、海上に浮く。漁師はロープを曳いて漁獲物を船上に曳き上げる。迷路は、方形・長方形・三角形など多種の形式のものが存在する。干満の差を利用するため、海岸近くに設置される。わが国の「魚」とまったく同様のものである。壺籠とは、餌の入った籠を海中に沈め、その中に対象物を誘い出して捕獲するという漁具である。近年では、金属の籠が韓国などより輸入されている。耙具は、熊手のような漁具で、主として貝類などを掻き揚げて捕獲する。

4. 漁村の類型

前項で述べた諸特徴を有する中国の水産業は、漁村をその生産活動の拠点として展開してきたといっても過言ではない。それ故、漁業を中心とする水産業を論じる場合、漁村に関してもその基本的性格を検討する必要性が生じてくる。というのは、従来より、漁村については種々の学問分野において研究が行われてきた。しかしながら、概念規定など基本的な点に関しては、各々の

研究分野において、共通した一致点がみられない。そのため、いわゆる学際的（interdisciplinary）研究がおこなわれていると思われる。かかる意味において、漁村の類型を論じる前提として、漁村を形成する中心的な構成要素である漁民および漁村の性格をまず検討しておこう。とくに漁民を重視するのは、漁民をどのように把握するかによって、漁村自体の性格が異なると推察できるからである。

1) 漁民および漁村の一般的性格

漁民とは、専門的に魚介類を捕獲することを生業としている人々の集団を総称し、主として農業に従事する農民や、木材加工などの林産物によって生計を営んでいる山民などとは比較対照される概念である。また漁民は、ある特定の漁場での資源が枯渇すれば、他の漁場を求めて移動するという移動性を伝統的に有していることが生業上の特色となっている。このことに関しては、既に指摘したところである。このような一般的性格を有する漁民が集団で居住している生活空間が漁村と称されている集落である⁴²⁾。

以上論じたような特色を有する漁村は、立地条件・社会構造・流通形態など、どれ1つを取りあげてみても、複雑多岐な様態を示している。かような種々の形態が生じたのは、主として次のような要因が複雑にからみ合っているからであろうと推定できる。

その第1は、漁村が立地している自然環境に規定されるもの。この中には、例えば海流・水深などの海洋学的、あるいはプランクトンに代表される生態学的要因も含まれる。第2としては、各種の漁具・漁法をはじめとする生産手段をめぐる複雑な漁村の社会・経済構造があげられる。第3としては、漁区に代表される種々の漁業権に関するものである。これらの諸要因が、上述のように、漁村という枠内に内包されているために、従来よりその定義は困難をきわめていた。

これまでの漁村に関する定義を概観してみると、次の2つの方向が主流であったと思われる。その1つは、漁村と称しているものは、海岸などに立地し、主として漁撈活動に従事している漁民的集落のことを示す、という半ば漠然とした解釈である。したがって、かかる立場をとれば、「漁村と農村との区分は、何処にあるかということは観念上では分かりよいやうであって、実際には区別がむづかしいものである」(内田寛一 1934 p. 441), とか「多分に慣用法的な性格をもっている」(大村肇 1957 p. 167) に代表されるように、曖昧な定義しか与えることができないことになる。

一方、これに対して、漁村といえども、純漁村は少なく、半農半漁村が多いので、他の村落と区分する手段として、集落中における漁業人口数が総生産人口数に対してある一定程度の人口数（20パーセント）をもつものとする(藪内芳彦 1958 p. 1, 高桑守史 1983 pp. 15~16など)⁴³⁾。しかし、生産人口数の比率というそれ自体相対的な概念で果して漁村は定義できるであろうか。この点は大いに疑問が残るところである。

したがって、以上みられた従来の漁村に関する定義は厳格なものとはいえない。すなわち、漁村はあくまでも、集落の一形態として把握されるべきであると思われる。それ故、他の集落と明白に異なっている独自のメルクマールで規定しなければならない。そのメルクマールとは、漁業

協同組合の存在である⁴⁴⁾。この漁業協同組合に注目した漁村の定義も試みられている（藪内芳彦 1958 p. 15, 柿本典昭 1977 p. 7など）。田畑も、これらの先行業績を受けて「漁村とは、その生産形態は、漁撈中心であり、ムラビト（漁民のこと―筆者註）かそれに何らかの関連を有する社会集団（social group）で漁業協同組合もしくはそれに類似する組織をもつ集落である」⁴⁵⁾（田畑久夫 1982 p. 70）と規定したことがある。ここでの定義で注目したいのは、その対象を一種の社会集団⁴⁶⁾と看做す点である。つまり、漁法という特殊な生産手段をとる漁業は、他の社会集団例えば農業集団などよりも共同体規制が強いと考えられる。したがって、人民公社の解体に伴う生産責任制が導入された現代中国とはいえ、漁村は、現在でも、共同体としての機能を強固に保持しているように思われる。

2) 漁村の類型

以上論じたような一般的性格を有する漁村は、各種の指標を用いることによって分類することが可能である⁴⁷⁾。中国の場合、主として経営主体の規模⁴⁸⁾により区分すれば次のようになる（田畑久夫・金丸良子 1991b pp. 14～15, 田畑久夫 1992 pp. 42～43など）。

a) **個人経営**。沿岸漁業が主体で、生産責任制が導入された1980年代以降急速に顕著にみられるようになった。個人経営と称しても、数名の漁民が共同で資本を出資して小型木造漁船（「个体船」と呼ばれる）を所有し、操業するケースが多い。捕獲された魚介類は、地元の漁港に出荷されるよりも上海などの大消費地に直接水揚げされることが多い。海面漁業以外に鵜飼などの河川漁業にもみられる形態である⁴⁹⁾。

b) **単一の漁業集落による経営（漁業生産隊を形成）**。個人経営同様、主要漁場は沿岸となる。集落内に1つの漁業生産隊が存在し、そこを中心に操業を実施している漁村は、小規模であるが、漁業が最大の集落産業であるため、漁業生産隊の経営者（「総経理」）が村長を兼職するケースが多い。

c) **複数からなる漁業集落による経営（漁業生産大隊を形成）**。漁場は近海中心である。複数の漁業集落により1つの漁業生産大隊を形成する。したがって、規模も大きくなるが、操業など基本的なシステムは、漁業生産隊と同様に運営される。

d) **漁業郷による経営（漁業公社・漁業公司を形成）**。漁業郷とは、正式な行政単位ではないが、行政上の漁村が数ヶ所集合したものである。その漁業郷による経営が主体となる⁵⁰⁾が、一部には市による経営もみられる。漁民を漁村から募集して実施する会社形式による漁業体である。日本をはじめとする外国との合資会社もみられる。漁場は、一部遠洋漁場を含む近海漁場が中心となっている。独自の冷凍倉庫など近代的な設備をもつものも多い。

なお、近年、実質的には経営規模が漁業生産隊・漁業生産大隊であるのに、名目上漁業公司と称している漁業隊も存在する。

5. 漁村の事例

前項で論じたように、地の漁村は a) から d) までの 4 類型に区分することができた。この 4 類型の中でも、伝統的な形態を残存している典型的な漁村と看做されるのは、b) 類型の漁村であると思われる。それ故、このタイプの漁村の事例を、山東省および浙江省に求め、以下において検討していくことにする。個々の漁村の分析に入る前に、山東半島および舟山諸島の概況を簡単に説明しておこう。

山東半島は、山東省西北端に位置する中国最大の半島である。半島は、渤海と黄海とを結ぶ渤海海峡を隔てて、遼東半島と対峙している。また、海峡沿いには廟島諸島が位置している。地質構造的には、片麻岩と花崗岩が主体で、大部分は海拔高度400メートル以下の丘陵となっている(木内信蔵 1984 p. 222)。海岸線は、膠州湾・崂山湾・荣成湾・竜口湾などをはじめとする多くの湾を有し、出入りに富んでいる。そして、これらの湾を中心に多くの漁業基地が存在する。

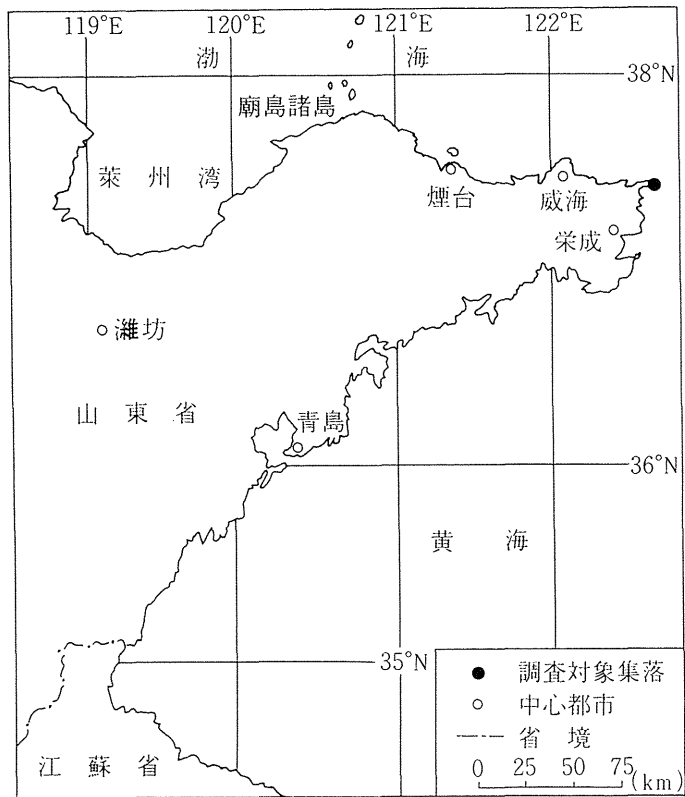
一方、浙江省西北部に位置する舟山諸島は、既に指摘したように、その近海が好漁場として知られている。それ故、浙江省の近隣の各県、または福建・江蘇・上海などの省や都市からの漁船が年間を通じて多数出漁している。さらに近年には、この海域に日本を筆頭に、韓国・香港などの漁船が操業している。これらの影響を受け、漁獲量は減少傾向にあるので、地元では長年実施してきた塩田を廃止して養殖場を開き、主として対蝦などのエビ類の養殖が増加しつつある。

本稿では、b) 類型の事例として、山東省威海市荣成市龍須島鎮西霞口村・浙江省舟山市北蟬郷北馬峙村・同省嵊泗県緑華郷東庫山村の3集落を選定した。

1) 威海市荣成市龍須島鎮西霞口村⁵¹⁾

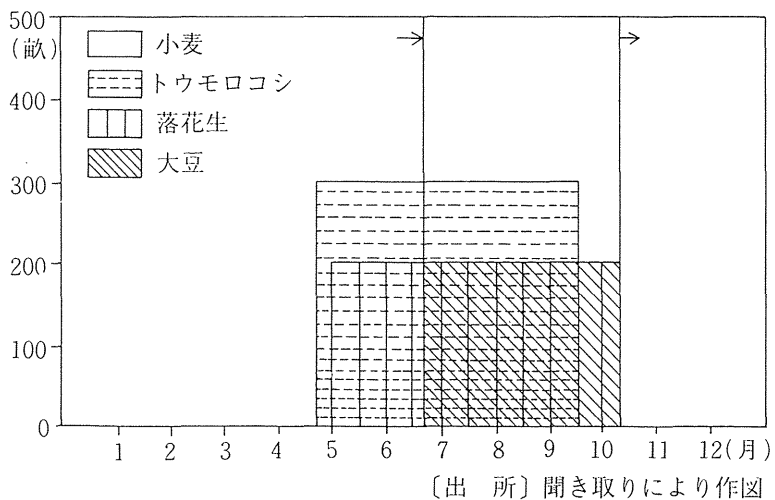
荣成市は以前荣成県と称せられ、12の鎮と16の郷で構成されている。市全体の人口は約175万人で、そのうち西霞口村が所属する龍須島鎮には約1万7,000人が居住している⁵²⁾。この龍須島鎮には、西霞口村を筆頭に6ヶ村が存在する⁵³⁾ (第6図)。戸数は460戸、住民は約1300人である。そのうち、村内で漁業に従事しているものは800名を数える。しかし、これらの漁業に従事するものの50パーセント強は、荣成市の他村などから来住した労働者であり、本来の漁民とはいえない。したがって、村民のなかで、漁業に専業として従事するものつまり漁民は約300名となる。そのうち漁民戸籍(「漁民戸口」)を有している住民は、村民全体の1割に相当する約130人である。他の村民は戸籍上「農民戸口」となっている⁵⁴⁾。

西霞口村を運営するのは村民委員会である。同委員会が管理する下部組織として漁業公司・農業隊・工業隊が存在する。その中でも、とくに漁業公司の規模が巨大なため、漁業公司の幹部会が村民委員会も兼ねる。さらに、既に述べたように、同公司の「総経理」は西霞口村村長も兼ねている。また、村には、農業隊が組織されていることから推定できるように、耕地が600畝(1畝は6.67アール)存在する。そのうち、500畝の畑地には小麦・トウモロコシ・落花生・大豆が栽培されている。これらの栽培作物のなかでもっとも主要なものは小麦で、畑地全域にわたって栽培されている。それ故、第7図に示したように、他の作物は小麦畑の間にいわば間作の形態で



第6図 西霞口村の位置

植えられることが多い。耕地の残りの10畝は、リンゴ・ナシ・モモなどの果樹園として利用されている⁵⁵⁾。



第7図 西霞口村農業カレンダー

a) 漁業会社の概要

西霞口漁業会社は、1982年末に創設され、当初より生産責任制を導入していた⁵⁶⁾。生産責任制導入以前は、村内に8つの農業生産小隊と1つの漁業生産大隊⁵⁷⁾（200名規模）が設置されていた。これらの生産隊はすべて、龍須島鎮人民公社の管理下に置かれていた。漁業生産大隊当時、漁船といえば小型の木造機帆船を意味した。漁船の規模は20馬力と40馬力のもので、7・8艘所有していたにすぎなかった⁵⁸⁾。1970年代以前には、人民共和国成立以前の帆船時代よりみられた「眼晴」と称する船首に眼を付ける風習が残っていたが、現在では確認できなかった⁵⁹⁾。なお、西霞口村の住民は、山西小兪次県から成山衛の兵士として、明朝末期に荒涼たる荒地だったこの地にいわば防人として来住した。そして、兵士退役後も故郷に帰らず、そのまま当地に居つくようになったとされる⁶⁰⁾。

第5表 西霞口漁業会社の組織

組織体	内 容	従業員数（人）
遠洋船隊	漁撈に従事（近海中心）	505
近洋船隊	漁撈に従事（沖合中心）	240
養殖隊	海帯・裾帯・扇貝の養殖	200 余
加工廠	魚・エビ類の冷凍・乾燥	100
冷凍廠	30・50の両トン収納の冷凍倉庫	——
船戸廠	1000馬力までの漁船の修理	120
養貂場	毛皮洋テンの飼育	20
魚粉廠	ニワトリなどの飼料	20
罐詰廠	魚・果物の罐詰	——
建築公司	倉庫・住宅などの建築	——
運輸隊	魚・燃料の運送	——

（註）—— 数値不明

〔出所〕聞き取りより作成

現在の漁業会社は、第5表にみられるように、遠洋船隊・近洋船隊と称せられている捕漁隊⁶¹⁾や水産加工廠（工場）など多くの水産関連の組織体から構成されている⁶²⁾。かかる組織体のなかで、中心的な役割を担っているのは直接魚を捕獲する遠洋・近洋の漁船隊である。最初に、この両船隊から検討を開始していこう。

遠洋船隊。遠洋船隊では、600・185・60というそれぞれ馬力の規模が異なる漁船を合計60艘保有している（第6表）。これらの各馬力の漁船のなかで、600および185の両馬力の大型漁船は主要漁法・漁場が共通しているという特長が認められる。すなわち、両馬力の漁船の漁法の中心となる漁具に関しては、ともに2艘の漁船で操業する「双船拖縄」を使用する曳網であるという一致点がみられる。この曳網には、「底拖」および「漂拖」と地元で称している2つの漁法が存在する。前者は底曳と呼ばれている漁法で、海底に棲息する魚類を主として捕獲する。後者は海底ではなく海中に沈めた網を曳くもので、一般に中層曳と称せられている漁法である⁶³⁾。なお、

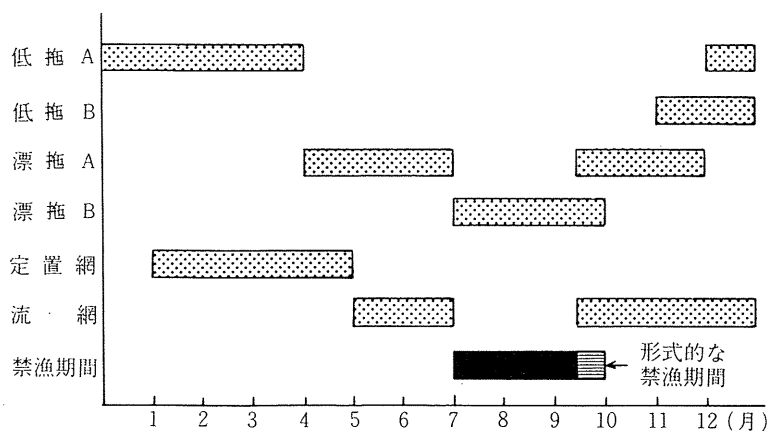
表6 遠洋漁業隊の規模

重量（馬力）	所有数（船）	乗務員（人）	主要漁法	主要漁場	船体
600	2	47	底拖・漂拖	朝鮮半島西海沖～舟山諸島沖の公海	鋼鉄
185	20	23	底拖・漂拖	朝鮮半島西海沖～舟山諸島沖の公海	鋼鉄
60	38	12	定置網・流網・底拖・漂拖	渤海湾	木造

このように、相異なる漁法が実施されるが、各々専用の漁船が存在するのではない。すなわち、「底拖」は12月から翌年の3月までの冬季に、「漂拖」はそれ以外の季節というように、同一漁船において、時期が異なれば漁法も変更されるのである。また、主要漁場は、北が朝鮮半島西海岸沖の黄海から、南は舟山諸島沖の公海上までと限定されている。しかし、操業の中心は舟山諸島沖の公海上となっているので、日本・韓国・台湾などの漁船とも競合することになる。

1回当たりの出漁期間は、漁場などにより一定していない。例えば600馬力の漁船の場合、朝鮮半島西海洋沖の黄海上での操業では約半月であるが、舟山諸島沖での作業では1ヵ月近くも要する⁶⁴⁾。

操業の季節は、例えば600馬力の漁船による「底拖」では12月から翌年の4月末日までというように、漁法などにより明確に規定されている（第8図）。「底拖」は、漁業会社が所有している



（註）Aは600・185馬力の漁船共通の漁法

Bは60馬力の漁船のみの漁法

〔出所〕聞き取りにより作図

第8図 漁業カレンダー

各馬力の全漁船が実施する共通の操業形態である。しかも、600および185の両馬力の漁船は、ほとんど同一の魚種を主対象に捕獲している。すなわち、主要な漁獲物としては、黄魚・黄姑魚・

帯魚などがあげられる。「漂拖」の場合も、同様に600・185・60の各馬力の漁船によって操業が行なわれる。操業期間についても、600馬力・185馬力の漁船では同期であり、鮫魚（*Scomberomorus niphonius*）・鯧魚・鮎魚（*Pneumatophorus japonicus*）・河豚魚などが主として捕獲される。

60馬力の漁船の場合、上述したように、「底拖」・「漂拖」が600・185の両馬力の漁船と同様に実施される。しかし、両漁法とも、それぞれ操業期間が大型漁船とは異なっている。すなわち、「底拖」では、操業が大型漁船の場合よりも数ヶ月早く開始され、さらに漁場も成山島沖の黄海に限定されている。また「漂拖」についても、操業は7月から9月末までの3ヶ月間のみで、漁場も渤海と黄海の境界付近となっている。かかる理由は、このクラスの漁船が「底拖」・「漂拖」の他に、定置網・流網をも実施するためであると看做される。定置網は、朝鮮半島西側の黄海上の第75海区第5小区と称される海域で実施される。この海域では、資源保護の観点から、漁網のます目を0.6×3.3センチメートルと決めている。対象物は、主として鷹爪蝦（*Irachypenaeus curvirostris*）である。一方流網は、秋季を中心に渤海湾一帯で実施され、鮫魚などが捕獲される⁶⁵⁾。

第7表 600馬力漁船員の職制と収入

職 制	収 入*
船長	100
大副 (一等航海士)	80
大車 (一等機関士)	90
二副 (二等航海士)	70
二車 (二等機関士)	70
三副 (三等航海士)	70
三車 (三等機関士)	70
捕撈 (魚撈長)	60
水手 (魚撈員)	50

(註) * 船長の収入を100とした数値
[出所] 聞き取りより作成

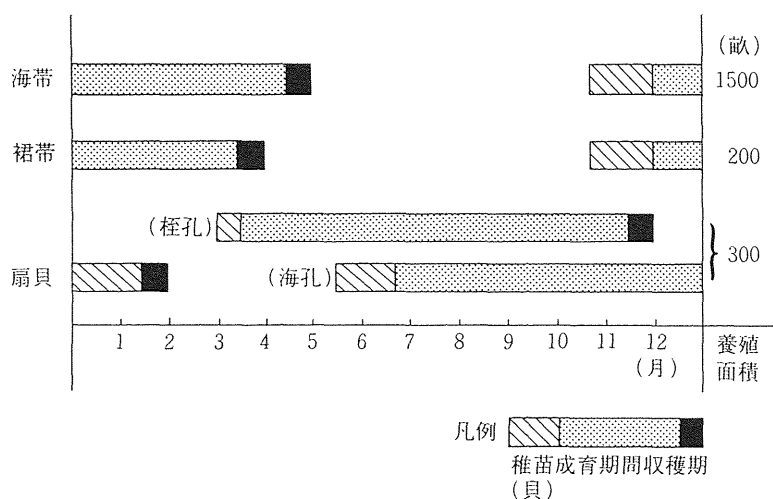
なお漁船には、乗務員の人数や役割が各々決まっている。例えば、600馬力の大型漁船の場合、乗務員数は2艘で47名である⁶⁶⁾。その職制は、船長・「大副」(一等航海士)など9段階に分かれている(第7表)。収入は生産責任制なので、その年度の水揚げ高の大小によって異なる。各々の職制の収入は、例えば「大副」は船長の80パーセントというように、船長の収入を基準に定められている⁶⁷⁾。同様に、185馬力・60馬力の漁船に関しても、乗務員には船長を筆頭とする職制が存在する。各馬力別の漁船の乗務員の収入はほぼ同額であるが、185馬力の乗務員が平均すると高収入であるといわれている⁶⁸⁾。

近洋船隊。近洋船隊が所有する漁船は、60馬力の木造機帆船のみで、約40艘である。主要漁場としては、漁船の規模が小さいため、沿岸が主体となっている。漁場は、北方の渤海湾漁場と、隣接して南方に位置する通称「青石漁場」の2ヶ所である⁶⁹⁾。これらの両漁場では、期間によって実施される漁法が異なっている。す

なわち、冬季を中心とした季節(11月から4月末まで)は定置網と「底拖」⁷⁰⁾が実施される⁷¹⁾。両漁法は、漁場の状況、魚群の濃淡などにより使い分けられるが、渤海湾漁場では「底拖」の方

が多く用いられる。主要漁獲物としては、鰯魚（*Paralichthy olivaceus*）・老板魚（*Raja porsa*）・鰈魚・墨魚（*Sepiella esulenta*）・鷹爪蝦など多種類である。その後、5月から11月にかけては両漁場とも流網漁が中心となり、鰈魚・鰈魚・対蝦などの漁獲が多い。流網の出漁期間は他の漁法よりも長期間で、1回の操業は1ヶ月近くもかかる。なお、渤海湾漁場では「底拖」が10月以降にも実施されることがある。

養殖隊。近年、天然資源の枯渇現象が顕著であることなどを契機として、漁業公司では養殖業にも非常に力を入れている。養殖隊には約200人が従事している。養殖は1960年代より開始された。当時は、海带（*Laminaria japonica*）・裙带（*Undaria pinnatifida*）だけであった。その後、1980年代に入ると扇貝（*Chlamys farreri*）の養殖も行なわれることになった⁷²⁾（第9図）。



〔出所〕聞き取りにより作図

第9図 養殖カレンダー

養殖の時期は、海带・裙带が11月から翌年の4・5月まで。扇貝は春に開始するものを「桎孔」、5月末には始めるものを「海孔」と称している。これは、養殖する種類が異なるとされている。また、収穫も種類により多少異なるようである。海带・裙带は、沖合の海中に張ったロープに稚苗を挟むようにして垂らし、そのままの状態で育成を待つ。海带は、1畝当たり数トンの収穫が期待できる。扇貝の場合、幼貝の選別、貝に付着した虫の除去などに手間がかかる。しかし、販売単価が高いことなどから、今後の増産が大いに見込まれている。なお、これら以外に、海參・鮑魚の稚苗や稚貝を海底に放流し、資源の増加を企てている⁷³⁾。以上の事業を実施している養殖隊に所属している従業員1人当たりの年間収入は平均7000元であった⁷⁴⁾。

その他の組織体。西霞口漁業公司では、既に指摘したのであるが、漁業の中心となる遠洋船隊・近洋船隊・養殖隊以外にも第5表にみられるように、多くの水産関連施設を所有している。それぞれの施設は、次のような機能を担っていた。

水産加工廠は、一般には捕獲された魚の冷凍・乾燥・包装などを主要な任務とするが、当加工廠では、エビ類の加工を主体としている。正式の従業員は約100名である。漁獲量との関係で2～5月が最盛期となり、この期間ではフル稼働となる⁷⁵⁾。冷蔵廠は、水産加工廠の従業員が兼務したりするので、正確な人員は不明である。廠内には冷凍倉庫が2ヶ所あるが、さらにもう1ヶ所増設する予定である。しかし、冷凍能力はマイナス摂氏25～26度が限度であるため、能力は充分とはいえない。修造船廠では、造船は行わず、漁船の修理を専門にしている。

養貂場は、当漁業会社の性格をもっともよく示しているとされていた。ところが、現在では他の会社との競合が激しく、業績は芳しくなく縮小傾向にある。貂の養殖は、生産大隊が存在していた1978年ごろより開始し、1985年ごろが全盛期であった。しかし、貂の餌となる稚魚・小魚が会社には豊富に存在することなどから、今後の経営如何によっては大いなる飛躍が期待できる可能性も残している。同様のことは、飼料用の魚粉を製造することを主業務としている魚粉廠にも該当する。とりわけ、当廠で年間1,200～1,300トン製造される魚粉は、最新の技術を導入して製造された脱脂魚粉で、中国では先進的な商品との評価も高い製品である。

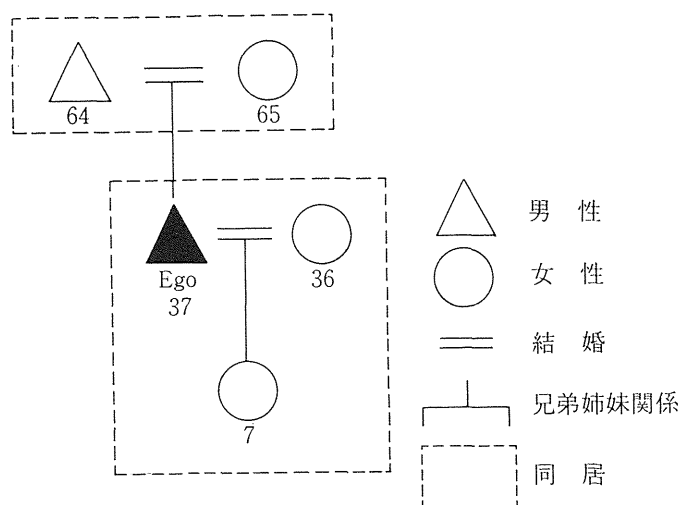
これに対して、罐詰廠は、魚および付近で収穫される果物の罐詰を製造してきた。しかし、中国における罐詰業界全体の不振の煽りをうけ、休業状態にある⁷⁶⁾。運輸は、捕獲された魚介類を市場などの出荷先に運搬するのを主要な任務としている。当運輸でとくに注目されるのは、700トンのタンカーを1艘所有していることである。漁業会社では、漁船に必要とする年間7・8,000トンのディーゼルオイルを大連市や煙台市の給油所から運搬するのに用いている。

b) 漁民の経済的基盤

西霞口村は、西霞口漁業会社を中心に村が機能してきたといえる。漁業会社の核は、遠洋・近洋の両船隊に所属する乗務員つまり漁民である。かような漁民の生活は、具体的にはどのようにして営まれるのであろうか。遠洋船隊に所属する600馬力の船長(T・S.)の家庭を事例として、経済基盤を中心にみてみよう。

T・S.の家族は、同鎮落鳳村出身の配偶者と娘の3人家族である。しかし、戸主であるT・S.は1人っ子なので、別居している両親も扶養している(第10図)。それ故、この一家は行政上5人家族と看做されている。すなわち、T・S.は船長なので「漁民戸口」である。したがって、T・S.を除く4名が各々の「口糧地」⁷⁷⁾として、1人当たり0.6畝ずつ合計2.4畝の耕地の分配を受けている。分配された全耕地には、10月初旬小麦(春小麦)を栽培する。その収穫が終了した翌年の6月下旬になると落花生(1畝)・大豆(1.4畝)を植える⁷⁸⁾。これら一連の農作業は両親も手伝うが、主として妻が担っている⁷⁹⁾。小麦は平年作の場合、1,000斤の収穫がある。しかし、1990年度は多雨という異常気象のため800斤しか収穫できなかった。落花生は、殻付きで約300斤の収穫があった。これらは食用にするのではなく、主として食用油として利用される⁸⁰⁾。T・S.家では、分配されている耕地から収穫されるこれらの量だけでは若干食糧は不足するという。

T・S.は年間200日ほど出漁する。したがって、在宅できるのは1ヶ月のうち数日間だけという状態である。現在では600馬力の漁船の船長であるが、漁船に乗務したのは16歳からであった。



〔出 所〕聞き取りにより作成

第10図 T. S.家の家族構成

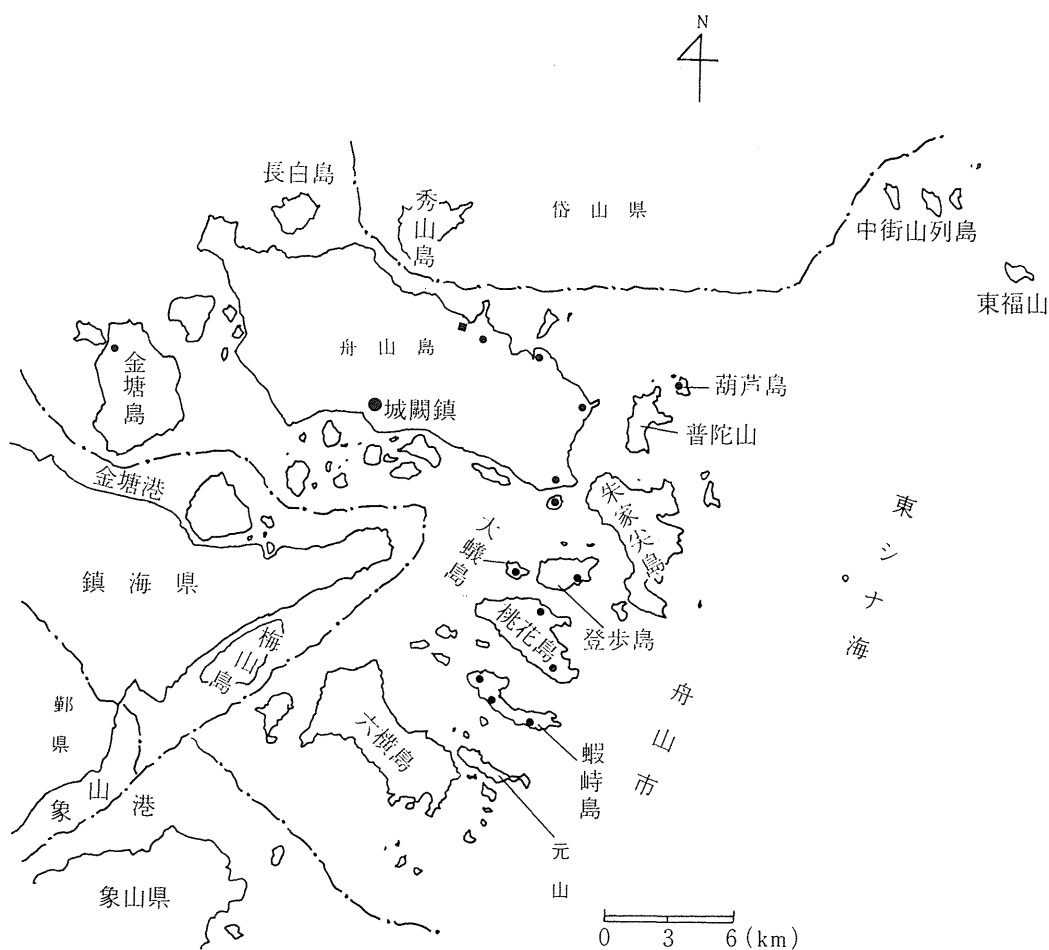
最初は「水手」（漁撈員）からはじまり、「二副」（二等航海士）などの職を経て、1970年から185馬力の船長に昇格した。船長になるためには免許状が必要である。T. S.の場合は、煙台水産学校で3ヶ月間の研修受けて免許を得た。600馬力の漁船の船長に任命されたのは数年前のことである。収入は、前述したように生産責任制が導入されているため、自分が指揮する漁船の年間総漁獲量の多少により異なる⁸¹⁾。

T. S. が現在居住している家屋は、コンクリート製の2階建ての家である。この形式の家屋は、1988年5月ごろ、西霞口漁業会社が建て、村民を対象に分譲したものである。購入代金は2.7万円であったが、漁業公司の方で一部を補助してくれた。現在では、西霞口村の多くの漁民がこのような新築の住居に居住している⁸²⁾。部屋数は、応接室2部屋、寝室4部屋、その他台所などを入れて合計9部屋もある。かような部屋数は、住宅事情が決して良好とは思われない中国においては、驚嘆すべき広さであるといえよう。

c) 漁業公司の将来計画

中国の漁村は、人民公社の管理による漁業隊から、生産責任制をとる漁業生産隊・漁業公司など大きく転換していった。西霞口漁業公司は、転換後どのような将来計画をもっているのだろうか。とくに、乱獲などによる天然資源の枯渇が叫ばれている現在、かかる動向は非常に興味もたれる。

西霞口漁業公司は、外国資本との合資あるいは合併を期待しているが、まだ締結されるには至っていない。しかし、日本を含む複数の水産会社とコンタクトをもつなど、交流は盛んである。漁業公司の水産品は国内の販売が主であるが、製品の一部は大連市にある合併企業を通じて、日本などの外国にも輸出されている⁸³⁾。漁業公司では、とりわけ日本との貿易を非常に切望してい



〔出 所〕 現地での聞き取り、
 《舟山漁志》編写組編（1989）
 『舟山漁志』海洋出版179頁
 表3-28などより作成

- 北馬崎村漁業生産隊
- 漁業郷所在地
- 行政中心地

第11図 舟山市における主要漁業基地

るが、日本への輸出が開始されたのは1985年以降のことで、比較的新しい。日本の水産会社は、鮫魚・小黄魚・鯧魚・鰻魚・河豚魚・赤貝（*Arca inflata*）・カズノコなどを好んで購入する。これらの魚介類および水産物のなかでもっとも高価なものは河豚魚で、底曳網・一本釣で捕獲される⁸⁴⁾。

現在もっとも困っていることは、当漁業会社と日本の水産会社との合併企業がまだ成立していないことである。そのため、当漁業会社の漁船が直接日本の港に入港できないからである。その対策の一環として、公司全体の投資総額5,000万円の40パーセントに当たる2,000万円を投じて、

新港湾を建設中である。この新港が完成すれば、日本など外国船籍の漁船の入港が容易になる。そのことが、合併の契機となると期待できるからである。

2) 舟山市北蟬郷北馬峙村漁業生産隊⁸⁵⁾

北馬峙村は、舟山島北東端に位置する北蟬郷に所属している（第11図）。北蟬郷は合計13の行政村で構成されているが、すべての行政村が漁村ではない。すなわち、漁業権を有しない純農村が8ヶ所、漁業権をもつ漁村が4ヶ所、漁業権および塩田を所有する漁村が1ヶ所というように、漁村か農村かに主要な生業形態が大きく2分される⁸⁶⁾。北馬峙村は、漁業権および塩田を所有する集落で、伝統的な舟山諸島の漁村といえよう。

戸数は280戸、人口は970人⁸⁷⁾で、住民の多くが村唯一の基幹産業である漁業生産隊に関連している。かかる理由は、村内には水田がまったく存在せず、畑地がわずかに36畝しかないためである。かつては各々の住民が村の特産物である製塩業に従事していた。現在でもその伝統を受け継ぎ、漁業生産隊でも888畝の塩田を所有している⁸⁸⁾。なお、北馬峙村では近年の人口増加に伴い、漁業生産隊のみでは労働力を吸収しきれなくなった。そこで、村内には、漁業生産隊とは別に、主として塩田で生産された製塩を運搬する運送業（24人が従事）、1984年より操業を開始している余剰女子労働力を活用した紡績工場（同40人）、養豚場（同20人）などで働くものも増加してくる⁸⁹⁾。以下では漁業生産隊について検討していこう。

a) 漁獲対象

漁業生産隊には、50トン（8人乗り）・45トン（同）・30トン（5人乗り）の合計3艘の木造機帆船を所有している⁹⁰⁾。これらの漁船による漁業対象は、各種のエビ類に限定される。種類としては大型の龍蝦（*Panulius stimpson*）なども捕獲されるが、その量はきわめて少ない。多くは地元で「滑皮蝦」と呼ばれている体長7センチメートルぐらいの淡青色のエビと、「糙皮蝦」⁹¹⁾と称されている体長6センチメートルの淡紅色のエビが主体となっている。1回の操業期間は通常5日間程度で、年間を通して実施されるが、春季の捕獲がもっとも多い。漁具は、「拖蝦」と呼ばれているエビ類専用の1艘曳きの曳網が使用される。この網は海底ではなく海中で曳かれるため、網の上部には浮き、下部には錘が付けられ深度が調節される。

1987年度の漁獲量は800担（1担は100斤、50キログラム）であった。水揚げされたエビ類は、次の2通りで処理される。すなわち、型がくずれていない良質なエビは、1斤当たり1.5～2.5円で舟山市にある冷凍工場に売却したり、漁船でそのまま上海市や寧波市などの大消費地に直接運搬し、販売される。現在では、後者の方が運送費がかかるが高価に販売できるので出荷額は多いという。市場などに出荷できない小エビや傷のついたエビは、漁業生産隊が養殖している対蝦の餌として利用される。漁船1艘当たりの年間総収入は、年度により多少差はみられるが、約10万元ぐらいにはなるという⁹²⁾。なお、漁場は、北は舟山諸島の最北端に位置する嵎山島沖合から、南は北緯28度付近の大陳までで、大陸沿いの南北に細長い広範囲にわたる海域である。また村には、漁法といえるほど大規模で設備が整ったものはないが、40トンの漁船が入港可能な港がある⁹³⁾。しかし、漁業生産隊には、水産加工工場・造船場など関連の設備は存在しない。

b)「個体船」(個人船)の存在

北馬峙村漁業生産隊の漁業形態として特筆すべきものとしては、漁業生産隊の構成員が複数で所有する「個体船」が3艘存在することである。漁船は、16トン(5人乗り)・7トン(4人乗り)・2トン(2人乗り)の木造機帆船である。16トンの漁船は、墨魚などのイカ類と梅童魚(*Collichthys lucidus*)を主要捕獲対象としてきた。しかし、イカ類は近年ではほとんど捕獲できないという。梅童魚は主として夏季に操業し捕獲する。漁場は、舟山諸島付近の海域で、南は洋鞍、北は嵯山までの範囲である。1回当たりの出漁日数は1～2週間である。漁具は「張網」である。なお1人平均の年間収入は数千円である(第8表)。これに対して、小規模な7トン・2トンの両漁船

第8表 「個体船」の漁業形態

漁船の トン数	船員数 (人)	主要海法	捕獲対策	授業期間	漁場	1986年度収入 ^①
16	5	張 網	イカ類 梅童魚	6～8月	舟山近海	2,000～3,000円
7	4	流 網	鰯 魚 鰯 魚	4～10月	村の沖合	2,000円
2	2	流 網	鰯 魚 鰯 魚	4～6月	村の沖合	1,300円

(註) ① 一人当たり平均

〔出所〕現地での聞き取りによる。

では、流網を主体としている。また、主要捕獲対象も鰯魚・鰯魚と共通している。ただし、漁期は7トンの漁船の方が多少長期間操業する。それが漁民1人当たりの平均年収の差となっている。漁場も同様に村の沖合など近場に限定される⁹⁴⁾。

このような「個体船」によって捕獲された魚は漁業生産隊とはまったく関係なく、自由に高価に販売できる市場へ運搬され、そこで取引が行なわれる。それ故、特定の仲介人などに売却することはないという。

c) 養殖

養殖場は1981年より開始された⁹⁵⁾。養殖は、日本などにも輸出されている対蝦が中心である。養殖池は、元来、塩田用に海水を一時蓄水する蓄水池の一部で、水深が比較的深いものを転用している。面積は小規模で30畝である。対蝦は養殖場で卵から人工孵化させるのではなく、稚エビ(「苗」と称す)を舟山市水産養殖公司より購入し、それを6～10ヶ月かけて成長させる。公司から購入する「苗」は、1万粒当たり30～40円である。養殖池1畝に付き4～5万粒ほど必要である。餌は漁業生産隊が捕獲した小エビ類を粉末にしたものを中心に、冷凍魚・配合飼料などである⁹⁶⁾。捕獲する小エビ類の量が少なければ、その分配合飼料を多く与える必要がある。それ故、1986年度のように、採算が合わなくなり赤字となる年度も存在する。通常では、養殖池1畝当たり、200～250斤の対蝦の収穫が期待できる⁹⁷⁾。このように、平均すれば比較的高収入が得られる対蝦の養殖であるが、現在のところ、1986年のように赤字になることもあり、事業を拡張する

ことは考えていない⁹⁸⁾。

d) 製塩

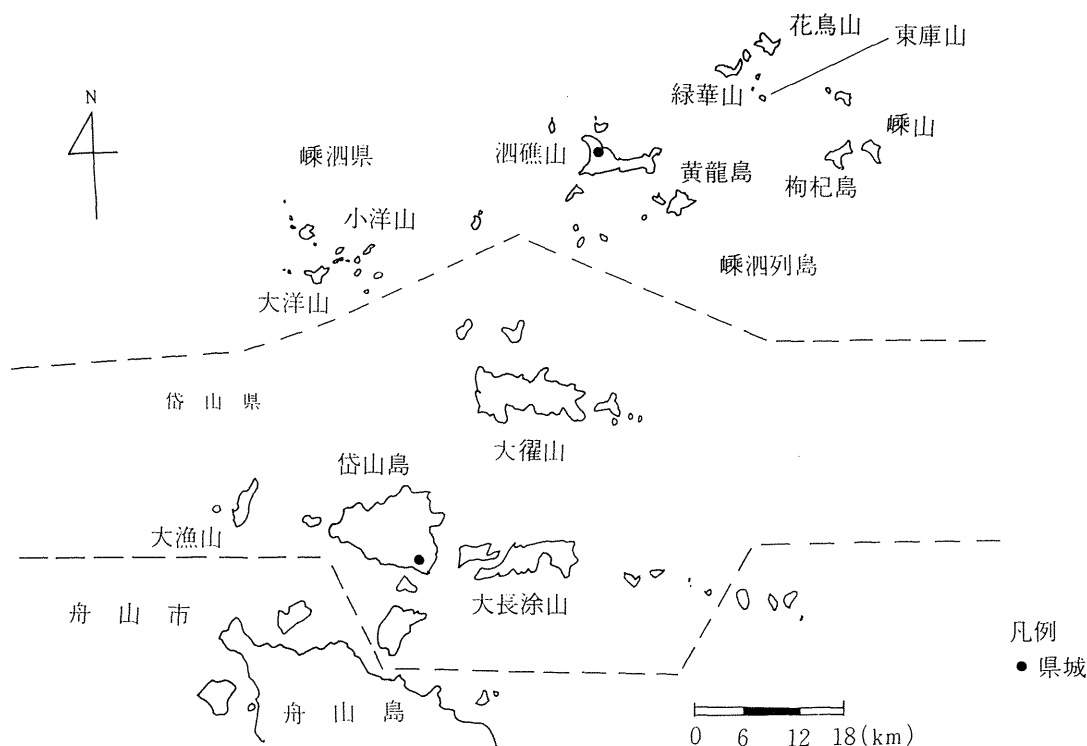
北馬峙村漁業生産隊では、漁撈・養殖が小規模なものに対して、塩田は、前述の通り、広大な面積を有している。それ故、漁業生産隊では主要な収入源となっている。製塩は、地元で「灘曬」と称されている入り浜敷塩田で行なわれる。塩の製造過程は、蓄水池に一時貯水し、温度を上げた海水を塩田に導き入れる「拿潮」（納潮）、1週間程度天日にさらす「製鹵」、2日間塩をかためる「結晶」の3段階に区分できる。漁業生産隊で実施されている方法は、伝統的なもので従来の製塩方法と大きな変化は認められない。しかし、塩田の下部には海水が地中に浸透するのを防止するためにビニールが敷かれてある点や、海水を早く蒸発させるために、木製の道具を電気仕かけの機械を用いて回転させている点など、技術改良の痕跡がみられる⁹⁹⁾。塩田では、年間を通じて製塩が実施されるが、全工程を天日に大きく依存するため、もっとも効率がよいのは夏季である。

作業は、12畝の塩田を1人が専従で受けもつという形態で行なわれる。1畝の塩田では年間3～5トンの製塩が収穫できる。中国では、製塩の等級を塩質が上質で純白の「精塩」、粒があらく色のやや黒い「普通塩」および「工業塩」の3種類に区分している¹⁰⁰⁾。このようにして生産された塩は、1トン当たり100円で販売できるので、製塩に従事する労働者の平均年収は2,000元ぐらいになる¹⁰¹⁾。なお、塩の販売価格はここ数年来変動していない。その理由は一括して舟山塩業公司へ出荷しているためであるという。すなわち、舟山塩業公司では、北馬峙村など各地の塩田から集めた塩を、省内各地、上海市、安徽省など近くの大消費地や不足している地域に転売するのである¹⁰²⁾。

なお、北馬峙村内には上述のように漁業生産隊が経営している塩田の他に、舟山市定海区塩業局に直属する「北蟬塩場」と称されている塩田が存在する¹⁰³⁾。この塩場は、730畝の塩田を所有しているが、従業員はすべて北馬峙村の住民である。

3) 嵊泗県緑華郷東庫山村¹⁰⁴⁾

嵊泗県は舟山諸島の先端に位置する県である。県内には394にもものぼる大小の島々が存在する。しかし、多くが無入島で有人島は17を数えるにすぎない。有人島は、西から東にかけて小洋山・大洋山・泗礁山・黄龍島・緑華山・花鳥山・枸杞島・嵊山というように、ほぼ1列に並んで位置している（第12図）。それ故、これらの島々を総称して嵊泗列島と呼ばれている。列島の主要な島々の名称から気がつくことは一舟山諸島全島の名称においても共通しているのであるが一島名の最後に「島」および「山」の2通りの付け方が存在することである。かような区別は、わが国の島名においてはみられない習慣といえよう。すなわち、舟山諸島では、農業が行なえるような耕地が存在する島の場合、舟山島・黄龍島のように「島」を付けて呼び、まったく耕地が存在しないか、存在してもわずかしかな島の場合、普陀山・泗礁山のように「山」を付けて区別しているのである。それ故、島名が判明すれば、前者では平坦な島、後者では山がちな島だとおおよその形が想像できるのである。嵊泗県では、县城（菜園鎮、県の人民政府所在地）のある泗礁山をは



第12回 嵊泗県概略図

じめ、ほとんどの島が後者に所属している。県全体の人口は、8万人余りで、そのうち60パーセント強に当たる約5万人が直接漁業を中心とする水産業に従事しているといわれている¹⁰⁵⁾。前述のように、県は舟山諸島の最先端に位置するが、大都市上海には意外と近い¹⁰⁶⁾。そのため、近年では夏季を中心に上海からの観光客も増加している。このように、国内では海水浴客を中心とした観光地として大変なにぎわいを呈している¹⁰⁷⁾。しかしながら、対象集落東庫山が所属する緑華郷は、シーズンである夏季でさえ、観光客はほとんど訪問することはない。最初に緑華郷の概況を説明しておこう。

第9表 緑華郷の行政村

島名	行政名	集落
西緑華山	西緑華 沙歴干 泥子坑	小岙・大岙・翻崗 沙歴干・石子岙・石竜塘 泥子坑
東緑華山	東緑華山	后岙・大塔・中塔・小塔
東庫山	東庫山	東庫山

〔出所〕聞き取りより作成

a) 郷の概況

緑華郷は、元来、西緑華山・東緑華山・東庫山・住柱山・求子山の5つの有人島を中心に形成された郷である¹⁰⁸⁾（第9表）。郷政府は、有人島最大の島西緑華山翻崗におかれている¹⁰⁹⁾。県城と翻崗との距離は19.6公里（1公里は1キロメートル）で、毎日県の最東端に位置する嵊山行きの定期船が連絡している。定期船は、早朝県城を出発して昼すぎに嵊山に到着する。その後直ちに折り返し、同じコースをた

て、早朝県城を出発して昼すぎに嵊山に到着する。その後直ちに折り返し、同じコースをた

どって夜帰港する。緑華郷の住民にとっては、不足する野菜・果物など生鮮食品を補給するためには欠かせない定期船である¹¹⁰⁾。

郷の戸数は1,222戸、住民は3,574人である。全住民は「漁民戸口」で、労働人口の約80パーセントが直接漁撈に従事し、残りは水産加工に従事している。操業に使用される漁船は80～150馬力の木造機帆船が中心で、郷全体では142艘ある。主要漁獲物は、梭子蟹(*Portunus trituberculatus*)・馬鮫魚(*Scomberomorus niphonius*)・鯧魚である。また近年では、鮑魚・地元では「淡菜」とよんでいる貽貝(*Mytilus edulis*)の養殖を行ない、日本をはじめ東南アジア各国に輸出している。なお、郷の漁撈で特徴的なことは、人民公社解体後、生産責任制に移行したが、例えば西霞口漁業会社に代表されるように、生産隊に代わるものとして、村全体で1つの経営体を設置しない点である。つまり、個々の漁民が自由にグループをつくり、資金を出資して漁船を所有しているのである¹¹²⁾。それ故、捕獲した魚類は、地元の水産加工場や上海などの市場に自由に販売することになる¹¹³⁾。緑華郷内にも、1986年に設立された水産加工工場が翻崗にある¹¹⁴⁾。なお、緑華郷は、南北航路上に位置するという地理的条件の優位性に加えて、海面も静かであるということから、緑華島の内港・外港をコンテナの積み出し港にするという計画も存在する。

b) 東庫山の漁業

東庫山は戸数約100戸、人口は452人である。詳細な歴史は不明であるが、180年ほど以前より居住していたといわれている¹¹⁵⁾。最初に來住した人々は、夏季に貽貝・墨魚を捕獲しているうちに、年間を通じて住みつくようになったといわれている。70年ぐらい前までは定住者が寧波出身者に限られていたが、それ以降岱山県・温州などの出身者も來住してきた。現在村には、50艘あまりの漁船がある¹¹⁶⁾。主要な漁獲物は、梭子蟹・鯧魚・石斑魚(*Epinephelus spp.*)である(第10表)。梭子蟹は現在ではカニ籠を用いて捕獲している。これは1992年よりの使用である。

第10表 主要漁獲物

主要対象物	漁 法	操業期間	主要漁場
梭子蟹	カニ籠 ^①	9～12月	花鳥山東北
鯧 魚	流 網	4～5月	花鳥山東北
石斑魚	一本釣	6～8月	東庫山周辺

(註) ①1992年より導入以前は流網

〔出所〕聞き取りにより作成

カニ籠は、韓国からの技術導入で、籠の中に小魚¹¹⁷⁾を餌として入れ、一昼夜沈めておく¹¹⁸⁾。このように、カニ籠が近年用いられるようになったのは、梭子蟹を生きたままに捕獲することができ、そのため高価に販売することが可能であるからである。以前は流網で捕獲された。

収入は、1艘の漁船で出漁した日には1

万元ほどになる。鯧魚は、春季が中心であるが、漁期は1ヶ月と短い。それ故、釣船を除く全ての漁船はこの期間操業に従事する。漁法はどのクラスの漁船も流網である。この出漁だけで、1艘当たり約1.2万元の収入がある。収入に差がみられるのは、主として漁船の規模によるという¹¹⁹⁾。石斑魚は、緑華郷の中でも当村が最大の漁場である。漁場は島の周辺で、水深が15～25メートルの場所が最適である。操業は日帰り、夏季が中心である。その他、冬季(12月)には流網

で馬鮫魚・帶魚も捕獲される。しかし、前者は1987年を境にして不漁が続いている。後者も以前ほど多くは捕獲できない¹²⁰⁾。

地元に「攻淡菜」と称されている潜水漁業も実施されている。季節は6～9月を中心とした夏季であるが、主として8月の大潮のとき行なわれる。潜水はかつて女性も行なったが、現在では男性のみ数10人が行なっている。使用するものは、手袋・網袋・「鉄」（貝おこし）などである。ウェットスーツ・眼鏡・酸素ボンベ・分銅などは使用しない。年齢は20～40歳ぐらいで老人・小供などは潜らない。潜水場所は、付近の無人島・岩礁などである。1回に40～50秒潜るが、長い場合は2分近く潜水する。数回潜水すると船上・岩礁上などで休息する。1日に数時間作業を行なう。潜水の深度は7～8メートルで、首からさげた網袋の中に貽貝などの貝を入れる。このように潜水を行なう漁民も、この時期以外は漁船に乗り、漁を行なう。現在では、貽貝の養殖が行なわれているところもあり、潜水漁法は衰退に向かっている。

東庫山では、1992年から貽貝の養殖が開始された¹²¹⁾。養殖は、10月に「苗」を植え、翌年6月以降になると収穫が可能となる。4人が従事し、900串の貽貝が収穫できた。収入は1万5,000～1万6,000元だった。

「股份制」は1982年よりはじまった。漁民は、平均すれば1人当たり5万元ぐらい投資して漁船の株主になっている。漁船には5～6名乗務するが、船長・機関士などは多少多めの分担金を出す¹²²⁾。この制度が導入されてから漁民の収入も大幅に増加し、家屋も新築するものが増加した¹²³⁾。また漁民の生活レベルの向上には急速なものがある¹²⁴⁾。

なお、従来、夏季には「拖網」で墨魚を中心とするイカ類を捕獲していたが、1958年をピークに減少を続け、とくに1984年以降ではほとんど捕獲できなくなった。

5. 結語

山東省・浙江省の漁村を事例として、中国の漁業を中心とした水産業の実状を具体的に検討してきた。研究視角・事例などの内容を再度要約する余裕をもたないが、以下のことはとくに指摘しておきたい。すなわち、中国においては、従来から実施されていた人民公社の管理下におかれていた漁業が、生産責任制の導入により、大きな転換にせまられたことである。その対策として、同じ漁村内でも、漁業会社の責任者が村長を兼任するという、従来の人民公社の形態に近いものから、すべてを漁民個人の責任に任すという完全な責任制に転化した形態など多様なタイプがみられた。将来の展望として、経済的効率のみを模索するのであれば、東庫山のような「股份制」の形態が適していると思われるが、不漁の場合のリスクも大きい。実際には、その実害が合併していたT漁業の撤退にもあらわれている。わが国の漁業を中心とした水産業の場合と同様、中国の水産業も今後困難な局面に遭遇することが予想される。その場合、漁業の基盤として機能してきた漁村は、どのような対策を講ずるのであろうか。今後の予測は検討がつかないといった状態である。中国の漁村の動向に注目したい。

なお、本稿では、中国における漁村についての一般的な性格に多くの紙面をさいたのは、従来かかる方面での研究がわが国においてはほとんど先例がなかったからである。また、本文中でも言及したが、調査対象集落は「未開放地区」に指定されている。それ故、漁村ごとの調査内容に精粗があることを、調査年代に開きがあることと併わせてお詫したい。中国における漁村研究は緒についたばかりである。

〔付記〕本稿執筆にあたり、種々御教示いただき、また貴重な御蔵書を拝借させていただいた岡山大学・関西大学名誉教授河野通博博士に心から感謝したい。

註

- 1) 崩壊した時期をいつとするかは議論が分かれるところである。筆者らは、ゴルバチョフ大統領が共産党の解散を宣言した1991年8月24日と考えている。
- 2) 『FAO 水産年鑑 1989年版』などの資料によると、中国の1989年度の漁獲量は、1,220万トン（世界の約11.3パーセント）を占め、1,231万トンを誇るソ連邦に次いで世界第2位となっている。しかし、本文中でも指摘したように、ソ連邦の崩壊以後、中国が世界第1位の漁獲量をあげていると推定できる。なお、1991年度の中国の漁獲高は1,354万トンである（中国国家统计局 1993）。
- 3) 中国の場合、一部には日本をはじめとする諸外国の資本を導入して、いわゆる合資形態をとる大規模な漁業会社が存在する。しかし、以下において本文でも論じるように、そのほとんどは漁村を基地とした小規模なものである。
- 4) 例えば、浙江省における代表的な漁村が位置する舟山諸島嵎泗県花鳥山などでは、現在でも中国海軍の前線基地が存在する。
- 5) 例えば、写真・ビデオ撮影の制限、漁獲量に関する統計資料の閲覧の禁止など。
- 6) 中国の水産業といえば、河川・湖などを中心とする淡水漁業の比率が高いことが特色とされる。すなわち、淡水養殖を含む淡水産の漁獲量は、総漁獲量の約41.5パーセントを占める（中華人民共和国農牧漁業部編 1986 p.127）。それ故、淡水漁業にも従事する漁民および漁村についても研究対象としなければならないが、本稿では、山東・浙江両省の沿岸および離島に位置する漁村を主たる対象としているため、今回の検討から除外した。
- 7) 現在の文化には、表面上現われることが少ないが、かつて存在したと看做される文化。それ故、この文化の特色は、現在のわれわれには眼に見えない点であるといわれている。本稿では、水稻稲作文化以前に成立していたであろうと推定される文化を、基層文化と想定している。
- 8) ユーラシア大陸東部の温帯に分布する植物帯。かかる植物帯は一般には常緑広葉樹林帯、別名ヤブツバキ（*Camellia japonica*, L.）クラス域（宮脇照編 1977 pp. 33～200）と称せられることが多い。しかし、常緑広葉樹林帯は大陸西部温帯においても存在するので、その植物帯と区別するために、大陸東部の植物帯を照葉樹林帯と呼ぶ。

なお、この述語は Laurisilva または Lorberwälder の訳語で、1930年ごろ中野治房が原語から翻訳したものである（上山春平編 1969 pp. 66～67）。それを生態学的用語として、学問的に最初に用いたのは吉良龍夫といわれているが、そのオリジナリティーは川喜田二郎によるとされる（上山春平編 1969 pp. 49～50）。

- 9) 筆者のうちの1人田畑も、拙論において論じたことがある（田畑久夫 1990, 1991, 1992, 1993など）。
- 10) 例えば、野生種のクズ（*Pueraria, Ohwi*）・ワラビ（*Pteridium quilinam, L*）・マムシグサ類（*Arisaema, Spp.*）およびカシ類（*Quercus, spp.*）に代表される堅果類を調理する前の水晒しなどのアク抜き・毒抜きの技術、茶の葉を加工して飲用するという慣行、鶏飼、麴を使用した発酵酒など多数。
- 11) 照葉樹林文化論の提唱者の1人である佐々木高明は、「照葉樹林文化」における農耕の発展段階を中尾佐助説を大幅に修正する形式で、3段階に区分した。そして、その第2段階に該当する「雑穀を主とした焼畑段階」（照葉樹林焼畑農耕文化）を典型的な「照葉樹林文化」と規定し、この段階の文化が「少なくとも縄文時代の後・晩期に西日本の山地に展開していた」と主張する（佐々木高明 1986 pp. 30～32）。
- 12) 山東半島の先端に位置する威海市と大韓民国インチョン市との間で、1990年9月よりフェリーが定期便として航行している。この点なども、山東半島と朝鮮半島が近いことを示していると思われる。
- 13) このコースは、佐々木高明が推定した、照葉樹林文化の要素の1つとされる稲作の日本列島への3つの伝播経路のうちの（A）コースに該当する。佐々木の主張する（A）コースとは、長江中・下流地域（江南の地）から東シナ海を横断して、朝鮮半島南部經由北九州に到着するというものである（佐々木高明 1989 pp. 460～471）。

なお、この佐々木説とは、江南の地から海岸線に沿ってまず北上するが、山東半島には達せず海上を横断するという点と、途中で朝鮮半島南部を經由しないという点の2点が、本稿でいう伝播コースと異なっている。

- 14) 舟山諸島の水産業の発達に関しては、中国側の文献（《舟山漁志》編写組 1989 pp. 9～37など）を参考にして整理した。なお、この点に関しては既に筆者ら（田畑久夫・金丸良子 1991d pp. 2～14）も言及したことがある。併せて参照されたい。
- 15) 舟山諸島では、この島のみ、城関鎮・沈家門鎮に代表される水産地区、および主として水稻2期作やミズイモ（*Colocasia, spp.*）などを栽培する純農村も存在する。しかし、他のほとんどの島は漁業を専業としている。
- 16) 面積は523.73平方キロメートルで、台湾、海南島および長江河口沖に形成された崇明島に次ぐ。なお、日本でいえば、天草下島（571平方キロメートル）と屋久島（503平方キロメートル）の中間の規模の島である。
- 17) この島には、普済禅寺などの仏教寺院が多数あり、中国四大仏教の名山の1つに数えられ、

1ヶ村の漁村（龍湾村）を除いて、仏教寺院を中心とした島となっている。なお、龍湾村については拙論（田畑久夫・金丸良子 1987 pp.120～121）で論じたことがある。

- 18) 1985年に合併した舟山市は、中国でいう「県級市」に該当する。中国では、周知のように、都市はその人口規模によって「直轄市」（北京・上海・天津の3都市省レベルの市）、「地級市」（地区レベルの市）、「県級市」（県レベルの市）の3つに区分されている。したがって、後述するように、山東省威海市荣成市というような事例も存在する。この場合、威海市が「地級市」であり、荣成市は舟山市と同様の「県級市」である。
- 19) かような形成過程によって成立した結果、舟山諸島は別名「大陸島」とも呼ばれることがある。なお、これら舟山諸島を代表する島嶼が北京から南西にかけてほぼ1直線上に並ぶ配列は、かつての大陸部に存在していた丘陵および方向を示しているといわれている。
- 20) この海流は、台湾暖流とも称され、水温は摂氏15度以上、塩分は34パーミル含まれている（《舟山漁志》編写組編 1989 p.41）。
- 21) この沿岸流は黄河河口付近で発生し、北緯30度近くまで南下する。流路は年間を通じて不変であるが、冬の方が流れが早い（雷宗友主編 1988 p.473）。
- 22) しかしながら、周知のように、長江を代表とする河川の周辺は、上流から運搬される土砂によって年中黄色く濁っている。このため、この海域でも、河川の河口近くは海域としては適さない。
- 23) しかし、外国人研究者の手になる記録も存在する。例えば、ドイツの著名な地理学者 von Richthofen, F. は、その日記（1869年11月23日）に当時の舟山諸島の一部を次のように言している。

「定海の碇泊所を發って、海岸づたひに、沈家門即ち舟山島の東南端の沈海峽へ航行した。北處では、夥しいジャンクを見出ししたが、それらは、福建の Tschin tshu 諸島の漁夫達の舟であった。彼等はこの季節に北へ行って魚を捕え、それを塩漬にする」（海老原正雄訳上巻 1943 pp.68～69）。
- 24) 舟山諸島には、田畑・金丸が1987・1988・1993、田畑が1992年に出かけ、field survey を行なった。
- 25) 成立の直接の動機は、島民20万人が集結し、12年間も続いた中国史上最初の「海上農民（漁民）」の反乱であるといわれている（《舟山漁志》編写組編 1989 pp.11～12）。
- 26) これを「海禁」と称した。数百年間続いたといわれている。
- 27) 漁船2艘をいう。通常トロール漁は2艘で操業する。
- 28) 漁場は、一般には海岸からの距離により、沿岸・沖合・近海・遠洋などに区分されてきた。しかしながら、これらの区分は相対的な分類であり、厳密な距離概念とはいいい切れない。なお、本稿でも後述するように、これらの名称の範囲——とくに近洋・遠洋——は、わが国と中国では著しく異なっている。
- 29) 山民に関しては、柳田（柳田國男、1906）をはじめとして、主として民俗学・文化人類学からの研究が多い。この点に関して、筆者ら（田畑久夫・金丸良子 1988 p.45）も言及し

たことがある。

- 30) 以下、中国の漁区の設定に関しては、中国側の研究書（張震林・楊金森 1983 pp.2~5）を参考にした。
- 31) 同期間の最寒期では、湾内には5メートルぐらいの結氷がみられるが、一般的には約3センチメートル程度でそれほど厚く結氷しない。
- 32) 一般には、中国人はフグを食用とする習慣をもたなかった。それ故、捕獲されだしたのは最近のことである。
- 33) 以下の記述に関しては、中国側の文献（《舟山漁志》編写組編 1989 pp.51~97など）を参考にし、筆者らのfield surveyで得た知見を加えた。なお、この点に関しては、筆者ら（田畑久夫・金丸良子 1991 pp.6~12）はすでに言及したことがある。併せて参照されたい。
- 34) 近年における舟山諸島のための具体的な統計的数値は、その概要さえ入手することができなかった。かかる理由は、浙江省など地元で「舟山の悲劇」と称されているように、近年とくにここ数年、主として最新式の技術を装備した漁船の導入などによる乱獲のため、漁獲量が急激に減少していることによると推定できる。実際、捕獲した魚介類を収納し、貯蔵する目的で冷凍工場をもつ漁業公司（一部には日本など外国との合資形式のものも含む）が、舟山諸島全体で10数社設立された。しかし、現在、魚介類の水揚げ高が少ないという理由で、稼働しているのは数社のみで他はすべて倒産もしくは休業をよぎなくされている。
- 35) 中国では、このように販売できる魚を「経済魚類」と称し、小魚など主として飼料などにまわされる魚を「雑魚」と呼び区分している。
- 36) この加工品は「淡鯊」と称され、舟山諸島の伝統的な特産品として有名である。
- 37) 船長約6.3メートル、船幅約1.5メートル、総重量2.5トンの木造船。この漁船は船底が扁平であることを特長とし、通常、大型漁船（「大捕船」と称す）を母船とする船団に加わり、操業する（《舟山漁志》1989 pp.111~112）。
- 38) 正式には、「嵎山小対」と称する木造船。船長約7.4メートル、船幅1.6メートル、総重量2.5トンである。舟山諸島ではかつてもっともよくみられた漁船。通常2艘で操業を行なう。
- 39) 筆者らが調査した1993年夏季には、舟山諸島の多くの島嶼では、漁期であるにもかかわらずイカの水揚げをみることができなかった。
- 40) 他の主要な生産手段として、本文中でも度々論じた漁場および漁船があげられる。後者に関しては、漁具以上に先進水産国からの技術導入が著しい。それ故、稿を改めて論じたいと考えているので、本稿では割愛した。

なお、藪内芳彦は次のように漁具を分類している（藪内 1958 p.58）。

- (1) 鉤や錨で突き刺す……蛸錨、かじき突棒、捕鯨鉤等。
- (2) 鉤でひっかける……一本釣、延縄等。
- (3) 捲せる……投網等。
- (4) 掬う……^{たも}撫網等。

- (5) からみつかせる……刺網（浮刺，流刺，底刺，施刺）等。
- (6) 通路を遮断する……簀^{さく}，柵^{さく}，築等。
- (7) 駆集する……^{ぶり}振縄を使用する鯛縛網等。
- (8) 餌でおびきよせる……飼付釣，棒受網等。
- (9) 篝火や電光で集める……禁入網，火光利用巾着網等。
- (10) 曳く……地曳網，船曳網（浮引，底曳，打瀬）等。
- (11) 施く……有囊網（揚繰，巾着）等。
- (12) わなにおちいらせる……蛸壺，浮敷網（棒受，^{はちだ}八手），底敷網（4つ手，4艘張），建網（大敷，大謀，落，枿，出，張）等。
- 41) 漁具に関しては，中国側の出版物（張震東・楊金森 1983 pp.115～171。《中国漁業資源調査和区劃》編輯委員会，《中国漁業漁具図集》編写組編 1989など）を中心に，日本側の研究書（井上実 1985など）を参照して整理した。なお，主として舟山諸島近海で実施されている主要漁具（法）に関しては拙論（田畑久夫・金丸良子 1991b pp.12～14）で論じたことがある。併せて参照されたい。
- 42) 集落形態としては，漁村は一般に集村となる。なお，沿岸沿いに立地している集落でも，その眼前の海域で自由に魚介類を捕獲できない集落，つまり地先権をもたない集落が，日本同様中国にも多いという事実を指摘しておきたい。
- 43) ここでいう一定程度の人口数とは，1戸に3人の生産人口があるとすれば，全戸数の60パーセントのものが，それぞれ1人の漁業従業者を出すという，職業人口構成上の推論から導き出された数値であるという（藪内芳彦 1958 p.1）。しかしながら，藪内の指摘した当時は問題がなかったかも知れないが，現在のように核家族化が進行している状況では，1戸に3名もの生産人口を有する漁家が一般的であるかどうか，大いに疑問を感じる。
- 44) 中国の場合，漁業生産隊・漁業公司の存在がこれに該当すると思われる。なお，わが国の農業協同組合が金融業・スーパーマーケットなども経営しているのと同様に，漁業協同組合も現在では水産関係のみに従事していない。しかし，これが，現在のところ，漁村を規定する最大のメルクマールと看做される。同様に，中国の漁業生産隊などにおいても，多角経営が営まれている。
- 45) なお，勿論漁村には，漁業が行える諸設備（港湾など）が整備されていなければならないし，住民も漁民であるという意識がなければならない。
- 46) 社会集団とは，社会学では，「特定の共同目標をかかげ，多少とも共属感をもち，相互作用を行っている複数の人々の社会的結合」（見田宗介・栗原彬・田中義久編 1988 p.439）と規定されている。本稿では，漁村を含む集落を主要研究分野としている地理学者による社会集団の概念をとくに参考にした（Bobek, H. 1948 同訳書 pp.9～26, Claval, P. 1973 pp.44～80など）。
- 47) わが国の場合，魚介類を捕獲する一方において，農業に従事している集落が多いという点に着目して，主として生産形態の相違を中心に類型化を行なうと，管見では，純漁村・主農従

漁村・主漁従農村・養殖漁村の4類型に区分できる(田畑久夫 1989 pp.10~14)。

- 48) 中国の漁村は、わが国の漁村とは操業・流通などの水産業全般にわたってのシステムが著しく異なっている。そこで、日本では一般的に行われている生業形態による区分ではなく、経営主体の規模による分類を行なった。
- 49) 一般には、個々の漁民が自由意志で実施するので、漁村あるいは漁業生産隊などとは直接関係をもたないが、経営主体をメルクマールとしたため、この形態も1つのタイプと看做した。
- 50) いわゆる郷鎮企業と称せられる経営形態である。なお、郷鎮企業の特色は、「農民(本稿の場合漁民——筆者註)(農村に居住する住民)の資本と労働力を集めて、郷村政府・農民連合・個人あるいは多様な企業の合作などによって創業・経営されている多種多様な企業群を総称するものである。…(中略)…それゆえ都市労働者に保障している食料の配給はなく、農村内での自給が原則である。」(上野和彦 1993 p.1)とされる。
- 51) 1990年8月に調査を実施した。なお、同調査の概略は拙論で報告したことがあるので、参照されたい(田畑久夫・金丸良子 1991a pp.67~69, 同1991b pp.75~81, 田畑久夫 1993b pp.47~49)。
- 52) 以下の西霞口村に関する数値はすべて1990年4月末日現在のものである。荣成市が所属している威海市は人口が約234万人である。市には、荣成市の地、環翠区(23万人)・文登市(60万人)・乳山県(75万人)が県レベルの行政単位として存在する。なお、威海市は、1990年7月に中国で最初の衛生都市(「衛生城市」)の指定を受けた。
- 53) 6ヶ村とは、西霞口村・河口村・礼村・蒲家村・落鳳村・龍須島村である。なお、威海市など山東半島北西部においては、村(行政単位)の下部組織として、一般には「庄」地名が付く集落が存在するが多い。例えば、龍須島村には、大西庄・臥龍庄・東塔など合計8つの集落が存在する。西霞口村には下部組織としての集落は存在しない。
- 54) 「漁民戸口」であれば、毎月一定の食糧の配給が受けられる。配給される穀物の量は職業の労働力の差によって異なる。西霞口村の「漁民戸口」の場合、1ヶ月45斤(1斤は500グラム)の食糧の配給がある。一般には、都市に居住する「城市戸口」の場合、1ヶ月に35斤程度の配給がある。このことから、漁民の労働量の厳しさが推測できる。なお、「農民戸口」は自給自足が建前なので、食糧の配給はない。その代わり、農業税としての「公糧」は国家に上納していない。この点に関しては、最近、貴州省の山岳地帯に居住する少数民族(「農民戸口」)でさえも、「公糧」を上納している事例が、筆者らの調査で認められる。それ故、その後当村の農民も「公糧」を納税している可能性が高い。
- 55) 果樹園には12名の労働者が働いているが、すべて年間契約の出稼ぎ労働者で1988年より安徽省からやって来ている。彼らには、年間の果樹の収穫量に応じて賃金が支払われる。
- 56) 農業隊・工業隊の生産責任制導入は1984年である。なお、本文中にも記したように、経営規模が漁業生産程度と看做されるのに、漁業公司という名称を使っている。
- 57) 一般の漁業生産隊より多少規模が大きいため、当時から漁業生産大隊と称していた。

- 58) 山東半島先端の漁村では、漁船の重量を一般に使用されているトン換算ではなくて、漁村にとり付けてあるエンジンの馬力で表示するのが慣行となっている。例えば、40馬力の漁船は、船長約17メートルの木造船である。
- 59) 船首の両側に付けられた。漁船の運行の無事を祈願するためであるという。「眼睛」に関しては、浙江省舟山諸島で撮影したものを発表したことがあるので参照されたい（田畑久夫・金丸良子 1987, 口絵写真）。なお、同様のタイプの眼は、わが国の漁船にも認められることなどから、漁民文化あるいは漁業文化圏の設定の際のメルクマールになると思われる。かかる方面の調査・研究も今後の研究課題の1つである。
- 60) 現地での聞き取りによる。なおこの伝承も含めて、漁業関係の聞き取りには西霞口村村長兼西霞口漁業公司「総経理」田文科氏の協力を得た。
- 61) 中国でいう遠洋とはわが国の場合の近海に、近洋は沖合にほぼ相当すると思われる。
- 62) 西霞口漁業公司の1989年の総漁獲量は1万4,000トンで、そのうち遠洋船隊が8,700トン、近洋船隊が5,300トンであった。
- 63) なお、とくに「漂拖」の場合、資源保護の立場から、「底拖」よりもます目の大きい網を使用するという。
- 64) かかる漁場の期間の長短も、資源の枯渇防止のためであるとされている。つまり、前者が短期間に限定されるのは、そこが黄魚 (*Clupandon punctatus*)・帶魚・海鰻 (*Muraenesox cinereus*) などの繁殖地として有名で、それらの産卵を保護する目的であるとされる。
- 65) なお、西霞口漁業公司を含む山東半島の漁業生産隊・漁業公司などでは、とくに魚群の濃い渤海湾のみを、7月1日から9月末日までを禁漁期間に定めている。しかしながら、各漁業生産隊・漁業公司などでは、禁漁期間の末期に該当する9月15日を過ぎると、操業開始にあたっての種々の準備を行なうという理由から、実質的には漁船の出漁が認められている。
- 66) 47という奇数が生じるのは、全体の責任者である船長は漁船2艘に対して1名だからである。
- 67) 1989年でもっとも高収入の船長は、3万余元りを獲得した。
- 68) 乗務員の年間平均収入は、個々の漁船の捕獲成績により収入が異なるため不明である。しかし近年では、一般に遠洋船隊よりも近洋船隊の方が高いという。かかる理由は、前者の場合、漁場が遠方のため燃料が嵩むうえに、大型のため効率が良くないためであるとされている。1989年度における近洋船隊の最高収入を得た漁船の乗務員の年間収入は、平均すれば2万7,000元であったという。
- 69) 本文中に記したように、渤海湾漁場は、7月1日から9月末日まで禁漁である。また「青石漁場」とは、青島市とその北方に位置する荣成市石島との間の黄海である。
- 70) 遠洋船隊に所属する60馬力の漁船と同様、「底拖」は2艘の漁船により行われる。乗務員も同様に12名である。
- 71) 「底拖」の場合、操業は夕方から夜半にかけて行なう。通常5・6日間出漁する。定置網の場合、海岸から約30カイリの範囲の日帰り圏が操業の基本となる。

- 72) 数年前より海參 (*Stichopus japonicus*) ・鮑魚 (*Halitis discus haunai*) の養殖を開始すべく、その実験を行なっている。なお、これらの養殖技術は栄成市水産局・同水産研究所より導入したものである。
- 73) これらは、補助的に資源保護を行なっていると考えられる。
- 74) 当時、1 元は約35円であった。この金額は、漁撈に従事する遠洋・近洋両船隊の従業員よりも少ないが、非常な高額であるといえる。
- 75) そのため、この期間のみ労働力の不足を来し、この時期900名にも及ぶ季節工を雇用している。これらの季節工は、江蘇省・安徽省などの隣省および山東省の臨沂などからやって来る。
- 76) この工場は1983年に開始した。最盛期は設立当初からの3 ヶ年で、この期間では年間の生産高が1,000トンにも達した。また当時は70～80名が作業を行ない、国内向けの青魚 (*Clupea palbasi*) ・鳳尾魚 (*Coilia mystus*) ・馬面鰱 (*Amaneses modestus*) などの魚類の罐詰が主体であった。
- 77) 自家消費用の小麦などの作物を栽培するための耕地。
- 78) 西霞口村で一般にみられるように、小麦の間に他の作物を間作しない。
- 79) この他、妻は多忙時に、エビの加工のアルバイトもする。
- 80) 大豆に関しては、収穫量を当家では計測していないので不明。
- 81) T・S. は、1989年には漁業会社の遠洋船隊の船長のなかでは最高の約3 万円の収入を得た。
- 82) しかし、地先権を所有しない近隣の村では、土壁で海草を屋根がわりにのせている伝統的な家屋も多く残っている。なお、T・S. の以前の家屋は瓦葺き屋根の一戸建てで、主屋には4 部屋あった。
- 83) 近々、香港に合弁企業を設立し、そこを通じて諸外国に輸出する計画を建てている。しかし、未だ合弁企業が設立されたという話は聞いていない。
- 84) 河豚魚の一本釣は、日本の業者からの注文が入れば実施する。1989年の実績では、日本に100トン余りの河豚魚を輸出した。
- 85) 調査は1988年8月に実施した。なお、同調査の概略は拙論で報告したことがあるので参照されたい (田畑久夫・金丸良子 1992b pp. 15～18)。
- 86) 純農村は三星村・灯塔村・蟬南村・小展村・東峰村・紅旗村・星民村・洪家村、漁村は黃沙村・釣内村・海峰村・釣門村、塩田をもつ漁村が北馬峙村である。
- 87) 以下本文中の統計数値の年次は、1988年4 月末日のものである。
- 88) 約100名の住民が塩田に従事している。
- 89) 紡績工場では主として羊毛のシャツなど下着を製造している。なお、その他大工・左官・石工・ペンキ屋などの手工業に従事するものが12名、商業に従事するものが同様に12名存在する。
- 90) 正確に表現すれば、これらの漁船は当生産隊の所有ではなく、北馬峙村居民委員会の集団所有である。
- 91) 一般には鷹爪蝦と称されている。

- 92) 漁船の乗務員で年間の収入がもっとも高かったのは船長で7,000元, 低かったのは「焼飯」(炊事係)で3,000元である。なお, 乗務員1人当たりの年間平均収入は約5,000元であるという。当時, 新規大卒の月給が150元前後であったので, 相当な高収入といえる。
- 93) もっとも小型の2トンの漁船の場合, 村の漁港の出入口周辺でよく操業が実施されている。
- 94) 3名が従事している。
- 96) 冷凍魚は, 傷ついた魚など出荷できないものを冷凍にしたものである。
- 97) 例年だと年間3,000元ぐらいの収入が見込まれる。それ故, 従業員1人当たりの年収は1,000元ぐらいとなる。
- 98) 養殖事業を拡大する計画がない別の理由としては, 他の漁村でも同様に塩田などを整理して対蝦の養殖場とすることが増加していることが考えられる。事実, 舟山諸島を含む浙江省では, 多くの塩田が姿を消し, 養殖場に転換されてしまった。
- 99) 木製の熊手のような道具を用いて, 人力で行なっている伝統的な形態を残している塩田も存在する。
- 100) 食用とされるのは「精塩」と「普通塩」である。
- 101) 実際には塩田の現場で働くのは全体の85パーセントであり, 他は幹部として製造された塩の管理を主たる業務としている。
- 102) 塩の販売価格は全国一定ではない。当地で製造された塩は, 安徽省で販売される場合もっとも高い。その理由は, 安徽省がもっとも遠方で運送費が嵩むからである。
- 103) 舟山市定海区には, 舟山市塩業局直属の塩田を含めて26の塩田がある。これらの塩田での塩の年間精算量は5万トンである。浙江省全体の約10分の1を占めるといわれている。なお省内では, 舟山市・寧波市・温州市・台州市の4地区で製塩が行なわれている。
- 104) 調査は1993年8月に実施した。
- 105) 統計数値は1993年4月末日現在である。
- 106) 県域までは, 上海市郊外の芦潮港より高速船で約3時間である。この高速船は, 1991年4月より運行が開始され, 毎日航行している。その他, 上海市十六鋪碼頭および舟山市定海からの船便も毎日運行している(金, 1992 pp.73~77)。
- 107) 外国人は1992年3月まで県全域を訪問することが禁止されていた。4月からは県城内のみ参観できるようになった。
- 108) 現在では, 東・西の緑華山・東庫山のみが有人で, 他の島は無人島になっている。なお, 1972年東緑華山と西緑華山とを結ぶ架橋(「緑華大橋」)が開通した。この橋の建設には当時駐留していた人民解放軍が関与していた。しかし, 軍隊がその後移動したため, 集落と橋とを結ぶ道路は中断されたままである。
- 109) 以前は西緑華村大厝が村の中心であった。しかし, ここは良港に恵まれないため, 行政機関は良港のある翻崗に置かれることになった。なお, 大厝と翻崗との距離は約1キロメートルで陸路で連絡されている。

- 110) 定期船には、毎日野菜・果物などの生鮮食品をもった小売人（行商）が集船している。
- 111) 利益はそれぞれの漁民が出している投資額に応じて分配される。
- 112) それ故、厳密な意味では漁業生産隊を形成していないので、b) 類型に該当しないかも知れない。しかし、集落の全住民が漁業に従事するということで、b) 類型の事例とした。すなわち、北馬峙村でみられた「個体船」が発展したものと考えられる。したがって、漁民であっても出資できないものは、漁船に乗務して漁撈を行なうことはできない。そこで、水産加工工場で働いたり、磯場に付着している亀足 (*Mitella mitella*) ・単歯螺 (*Monodonta labio*) などを採集して生計を立てることになる。
- 113) かように、すべて個人が自由に販売するため、郷政府としては漁獲量の正確な数値を把握することが困難だと思われる。かかる点も、部外者に具体的な数値を公表しない理由となっていると思われる。
- 114) 日本の大手水産会社であるT漁業との合併会社として創設された。資金はT漁業が出し、支払いは郷政府が買いあげた魚であった。この工場は、200トンの魚をマイナス摂氏20度で冷凍貯蔵することが可能で、舟山諸島の郷鎮企業としては当時もっとも新しい設備であった。しかし、魚の価格が不安定で、かつ一定した供給ができない。加工工場の従業員の経験不足でうまく稼働しないなどの理由で、1993年3月にこの工場からT漁業は手を引いた。現在では県の農業銀行の所有となっているが、休業状態である。
- 115) 東庫山村副書記沈府君氏の談による。
- 116) すべて木造機帆船で、最大のものは150馬力（2艘）で以下120馬力（10艘）・80馬力（5艘）などである。その他、石斑魚専用の釣船（3, 6, 12の各馬力）が10艘余りある。
- 117) 現地では「チンシュワン」と呼ばれていたが、学名などは不明。
- 118) 籠には多いときには20匹も一度に入ることがある。
- 119) なお、1993年の市場における売り渡し価格は1斤18元であった。
- 120) この他「張網」で小魚・エビ類を捕獲するが多くはない。
- 121) 郷内でも養殖の開始年代は異なる。例えば、西緑華村大畚では1990年より開始している。
- 122) しかし、かつての網元のように、資本だけを出資し、漁船に乗務しないというものはいなかった。
- 123) 1985年当時、コンクリート製の二階建て家屋が2万元ぐらいであった。
- 124) テレビ・洗濯機・冷蔵庫などが普及している。

引用文献

（邦文）

井上実

1985『漁具と魚の行動』恒星社厚生閣

木内信蔵編

- 1984『世界地理 2 東アジア』朝倉書店
- 見田宗介・栗原彬・田中義久
- 1988『社会学事典』弘文堂
- 宮脇照編
- 1977『日本の植生』学習研究社
- 大村肇
- 1957『漁村の構造』（木内信蔵・藤岡謙二郎・矢嶋仁吉編『集落地理講座 第2巻』朝倉書店 pp. 178～195 所収）。
- 佐々木高明
- 1983『照葉樹林文化への道ーブータン・雲南から日本へ』日本放送出版協会（NHK ブックス）
- 1986『縄文文化と日本人ー日本基層文化の形成と継承ー』小学館
- 1989『東・南アジア農耕論ー焼畑と稲作ー』弘文堂
- 田畑久夫
- 1982「わが国における海土集落の変貌ー五島列島宇久島平を事例としてー」歴史地理学紀要 24pp. 69～100
- 1989「漁村研究の動向」民俗と歴史21 pp. 1～21
- 1990「照葉樹林文化論と雲貴高原東部の少数民族の生業形態」兵庫地理35 pp. 43～58
- 1991「照葉樹林文化論の背景とその展開（Ⅰ）」兵庫地理36 pp. 22～35
- 1992a「照葉樹林文化論の背景とその展開（Ⅱ）」兵庫地理37 pp. 28～42
- 1992b「中国漁村の変貌ー山東・浙江両省調査による比較研究ー」立命館地理学 4 pp. 41～52
- 1993a「照葉樹林文化論の背景とその展開（Ⅲ）」兵庫地理38 pp. 12～29
- 1993b「中国の山の民・海の民」（坂口慶治・植村善博・須原洋次編『アジアの何を見るか』古今書院 pp. 42～49 所収）。
- 田畑久夫・金丸良子
- 1987「中国の漁村 舟山諸島のフィールドノートから」地理32-12 pp. 117～123
- 1988「山村研究の一視角」民俗と歴史20 pp. 43～59
- 1991a「中国山東半島の漁村(1)」地理36-3 pp. 67～74
- 1991b「中国山東半島の漁村(2)」地理36-6 pp. 75～81
- 1991c「中国山東半島の漁村(3)」地理36-8 pp. 86～92
- 1991d「中国舟山諸島の漁村ー現地調査による比較研究ー」民俗と歴史23 pp. 1～27
- 1993「ヤオ族の生業形態の研究ーフィールドサーヴェイを中心としてー」比較民俗研究 7 pp. 97～151
- 高嶽守史『漁村民俗論の課題』未来社
- 内田寛一
- 1934『経済地域に関する諸問題の研究』中興館。

上野和彦編

1993『現代中国の郷鎮企業』大明堂

上山春平編

1969『照葉樹林文化 — 日本文化の基層 — 』中央公論社（中公新書）

上山春平・佐々木高明編

1976『続照葉樹林文化 — アジア文化の源流 — 』中央公論社（中公新書）

上山春平・渡部忠世編

1985『稲作文化 照葉樹林文化の展開』中央公論社（中公新書）

柳田國男

1906「山民の生活」（『定本柳田國男集 第4巻』筑摩書房 pp. 493～503 所収）

藪内芳彦

1958『漁村の生態 — 人文地理学的立場 — 』古今書院

（中文）

張震東・楊金森

1983『中国海洋海業簡史』海洋出版社

金涛編

1992『嵎泗導游』上海文化出版社

雷宗友

1988『中国海環境手冊』上海交通大学出版社

《舟山漁志》編写組編

1989『舟山漁志』海洋出版社

中華人民共和國農牧漁業部編

1986『中国農牧魚統計資料』農業出版社

中国國家統計局編

1993『中国統計年鑑 1993』中国統計出版社

《中国漁業資源調查和區劃》編輯委員會《中国海洋漁具図集》編写組編

1989『中国海洋漁具図集（中国漁業資源調查和區劃之一）』浙江科學技術出版社

《中国自然地理》編写組編

1984『中国自然地理（第2版）』高等教育出版社

（欧文）

Bobeek, H.

1948 'Stellung und Bedeutung der Sozialgeographie' Erdkunde 2（藪内芳彦訳（1977）『社会地

理学論争 — 人文地理学の広場 — 』古今書院 pp. 9～26 所収)。

Claval, P.

1973 《Principles de Géographie Sociale》Arman Colin, Paris

von, Richthofen, F.

1907 “Tagebucher aus China 2Bde” Berlin (海老原正雄訳 (1943)『支那旅行記 上・中巻』
慶応出版社

新刊紹介

『中国 儺戯・儺文化国際検討会論文集』

『民俗曲芸』 雙月刊 第84期上・第85期下

本書は、1993年1月27日～29日に香港中文大学において開催された「中国儺戯・儺文化国際検討会 (International Conference on Nuo Theatre and Nuo Culture)」提出された報告をまとめて、『民俗曲芸』誌上に特集として組まれて刊行されたものである。

本論文集が出される背景としては、台湾の清華大学人文社会学院の王秋桂教授 (中国民間文学専攻) が、台湾のみならず、香港、中国、さらにはヨーロッパ・北アメリカのフィールド経験豊富な第一線に立っている活躍中の学者たちと協力態勢を築き、財源として豊かな蒋経国国際学術交流基金を巧みに活用していることが特筆できるであろう。

本論文集には、以下の報告が含まれる。「法事戯初探」(流彼得 [Piet van der Loon])、「殷上甲微作楊 (儺) 考」(饒宗頤)、「福建省陽地区の道教」(勞格文 [John Lagerwey])、「新加坡福建莆田人的北斗戲」(容世誠)、「安徽省貴池市劉街鄉太和章村的儺神会」(王兆乾)、「江西省万載縣潭埠鄉池溪村漢族丁姓的跳魁」(毛礼錫)、「浙江省東陽市漢人喪葬儀式及儀式劇調查」(保宏図)、「Ritual and Ritual Theatre in Liuzhou, Guangxi」(David Holm)、「重慶市巴縣接龍鄉新塢村小塢合作社雙溝觀音会調查報告」(胡天成)、「上

海県聖堂道院太平公醮」(朱建明)、「論“八將”在福建的流布、變異及儺文化意義」(葉明生)、「Group initiation and exorcistic dance in Xinghua region」(Kenneth Dean, Zheng Zhenman [鄭振滿])、「貴州省德江縣穩平鄉黃土村冲寿儺調查述要」(庾修明)、「山西曲沃任莊《扇鼓神譜》和扇鼓儺祭調查報告」(黃竹三)、「台灣東港平安祭典的王爺繞境与合境平安」(李豐楙)、「台灣的跳鍾馗」(邱坤良)。

以上の各報告を一つ一つ取り挙げて論ずることはできないが、全体を通じて、「漢人」の宗教儀礼が、中国人の学者によって直接に調査される傾向が近年相当に深化し本格化して来ていることが明らかに看取できるであろう。1993年4月下旬に台北で中国民間信仰の国際会議が開かれており、1994年5月にも同地で中国祭祀儀式と儀式戯劇の会議が予定されていると聞く。これらの学会への日本人参加者が殆どないこともあって日本の学界ではこれらの動向の情報が不足しているけれども、十分に注意すべきであると思われる。

(丸山 宏)

上巻 (84期), 1993. 7 月刊 293頁

下巻 (85期), 1993. 9 月刊 369頁

財団法人施合鄭民俗文化基金会

新台幣130元×2